
錯覚の閃光

山田 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錯覚の閃光

【Nコード】

N7707W

【作者名】

山田 潤

【あらすじ】

プロ野球界に彗星の如く現れたスーパークローザー^{むらやまかずみち}村山一途、彼の活躍は災禍の爪痕が残る街に勇気を与え、明日を信じる人々への道標となる。しかし彼には誰にも知られてはいけない秘密があった。

ブローグ

宮城県は或る海沿いの町、立ち昇る陽炎の中ガレキの撤去にあたる5、6名の男女が居た。年齢も着ているものも様々、ツナギ服に身を包む者も居ればジーンズにＴシャツ姿の者も居る。一見、寄せ集めの集団のようにも見えるが、その動きはよく統率のとれたものだ。今は倒れたコンクリート製の電柱を撤去しようとしているようで、クレーン付きの作業車両まで持ち出して作業にあたっているのだが、積み重なったガレキと軟弱な足場が邪魔をしてなかなか思い通りに作業は進んでいない。

「正しい、力いれてんのか？」

「目一杯だしてらあ、雄こそ手を添えてるだけじゃねえのかよ」

揃いのツナギを着た二十代半ばと思しき青年二人が大きな声でやり合う。だがそこに険悪さは微塵も感じられない。彼等にとってはそれが日常的な遣り取りなのだろう。片方は上背はそれほどないがガツシリした体躯で、もう一人の青年は均整のとれた体格をしていた。豪雨で緩んだ地盤を軽やかに歩く姿から細くとも柔軟で強靱な肉体の持ち主であることが伺える。

「喋ってないで手を動かせよ。昼間はこんなに暑くったってもう九月なんだ、日が暮れちまうぞ」

次に声を上げたのは額の広い男だった。中肉中背の三十代後半といった男の額には汗の粒が噴き出し、ジーンズの裾が汚れるのも厭わず汚泥に両足をつっ込み倒れた電柱に荷締ベルトを回している。隣にはベルトの束を抱えた若い女性が立っていた。男の要求に従って手渡しているのだろう。

「タツキーもね」

青年が一重瞼の目を細めて言い返す。正と呼ばれていた方の青年だ。腰をかがめていた額の広い男は体を伸ばすと怪訝そうな顔で訊ねた。

「何だよ？ そのタツキーってのは」

「貴之だからタツキー、伊都淵さんとか長くて呼びにくいじゃん」

「あはは、いいじゃないですかそれ。アイドル歌手なんかみたいで」

同じくツナギ服を着たドングリ眼の青年が屈託のない笑いを浮かべた。反してタツキーと呼ばれた男は苦々しい顔になる。

「勘弁してくれよ雄一郎君、歌も下手ならアラフォーなんだぜ。カ
タカナの仇名はキツい」

ベルトを抱えていた女性がくすりと笑い、頭の中だけで復唱した。
<タツキーですって>

<止めてくれよ、君まで>

同じく伊都淵が頭の中で抗議をしてからレッカー車に向かって叫んだ。

「カジさん、ベルトオツケーです。ブームを振って下さい」

クレーン車のリモコンを手にした男は頷いて最大限まで伸びたブームを旋回させる。作業をする男達の頭上へとフックのついた先端が振られてきた。

「足りないな……もう少し車を寄せられませんか？ 片荷になって
ベルトが抜け落ちちまう」

雄一郎の呼び掛けにカジと呼ばれた男が歩み寄ってきた。こちら
も揃いのツナギ姿だが一番年嵩のようだ。ヘルメットを脱いだ髪
の生え際には白いものがちらほらと見える。

「3mといったところか……あれ以上車は寄せられない。足場が軟
弱でアウトリガーが埋まってしまっただ。手作業でやるしかないだ
ろうな」

「これを持ち上げろってのかい？ 無理だよ、このサイズだと1ト
ンはあるぜ」

「男はたった4人、一人頭250kgか……重量挙げの世界記録に
近い数字だな」

正と伊都淵が交互に口にしたのはNO WAY だった。

「正、私達も手伝おうか？」

少し離れた所で見えていた華奢な女性が、ベルトを抱えた女性の隣に来てそう言った。

「かおりと依子さんは危ないから下がってなよ。ローラー台に乗せて少しづつ動かせないかな」

その問い掛けに伊都淵が応じる。

「無理だな、この足場では均等に並べることが出来ないし、キャパ250kgのローラー台はたった4枚。ベアリングがいかれるのが関の山だよ」

「だいたい、3・11からもう半年が経ってんだぜ？ それなのにここいらは未だガレキの山だ。政府は一体、何をやってんだよ」

「連中の頭の中には利権の二文字しかないのさ。ジュンさがよく言ってる？ 『テレビに政治家と女子アナの露出が多い国は間違ってる』って」

「まあな……それより雄、お前のタイトルマッチは三カ月後だろ？ いいのかよ、こんなことしてて」

「いいトレーニングになってるよ。カジさんは人使いが荒いからよく走らされるし、こうやってウェイトトレーニングにも事欠かない放射能汚染のせいで美味しいものが食えないから体重の心配もない」

「へえ、なんでもいいけど負けんなよな。今や国内に世界チャンピオンはお前だけなんだから」

「負けるつもりで試合に臨むつもりはないけど、それは相手も同じだからな。勝った方が負けた方より強かったってだけさ」

「謙虚というか頼りないというか……」

「さあ、お喋りは終わりだ。早くこの電柱をどかさないと次に進めない」

カジに促され、青年二人は折れた電柱に回した荷締ベルトの間隔を均等に振り分ける。

「クレーンは使えない、人手はないとなるとあの手だな」

「そうゆうこと」

ツナギ服の三人とかおりと呼ばれた女性の視線が、伊都淵と依子に集まった。

「またかよ……」

伊都淵がうんざりした顔で呟く。

「そう言うな、ボランティアに身を投じない——力を貸そうとしな
い人の全てが善意を失っている訳ではない。プライドや羞恥心がを
邪魔をしているのなら、それを取り除いてやるのもボランティアの
一環だろう。手を貸してくれた人々はみんな清々しい顔になって帰
って行くじゃないか」

「はいはい、分かりました。4、5人、見繕ってこればいいんでし
よ？——依子、行こう」

「ええ」

カジに促され伊都淵は依子を伴って通りへと向かった。

脳波は電気活動である。電位の変化が人の思考や行動に反映され
る。それを視認し操作出来るということは他人の意思に介入するこ
とに他ならない。そんな特異な能力の持ち主であった伊都淵と依子
は、過去にも何度か人足の手配を仰せつかっていた。正の言った？
あの手？である。ぶらぶら歩いているだけの通行人や、物見遊山気
分で被災地を訪れる観光客を意識誘導して作業を手伝わせていたの
だ。

人々が不可侵領域だと信じて疑わない頭の中、誰にも気づかれま
いと思い浮かべる思考なのだから勿論綺麗なものばかりではない。
言葉という包装紙を持たずダイレクトに伝わるイメージには思わず
目を背けたくなるようなことも屡々で、ボランティアのためとは言
え気乗りしない理由はそこにあった。なるべく人の良さそうなのを
見つけて引っ張ってこようと思ったが平日の昼日中では人通りも少
なく、選り好みなどしてられない状況に思えた。

「見事に誰も居やしないな……」

「あたし、水産加工場の方を見てくる」

「車に気をつけるんだよ」

「子供じゃないのよ、心配しないで」

笑顔で駆け出す依子を見送る伊都淵の目は、父親が愛娘を見るそれに似ていた。歳の離れた恋人を思いやる時、誰もがこうなるのだろうか……ふつと笑って人足探しの視線に切り替えると、海側から走ってくる一人の男が目をついた。上下ジャージ姿で年の頃は三代半ばといったその男は、さして特徴のない外見をしている。先ずは意識操作なしで声を掛けてみた。

「すみません。今、そこでガレキの撤去をしているんですが重機が入らないところにもってきて人手が——」

「ご苦労様です。いいですよ、お手伝いします」

頼み事を言い終わる前に快諾が返ってきた。「4〜5人連れてくる」と言った手前、もう少し粘ってみようと思ったのだが、通りに人通りは全くない。依子がなんとかしてくれるだろう——伊都淵は男と連れ立って先に仲間のところへ戻ることにした。

「なんだ、君も一人しか連れてこれなかったのか」

依子が連れてきたのは、腰まであるゴム長を履いた中年の男だった。自分が何故ここに居るのか分からないといった顔で突っ立っている。

「だって、誰も居なかったんですもの。この人だってやつと——」

<意識操作して引つ張ってきたのよ？ 頭の中は『ブラジャーの紐が透けてる』ばかり。他に誰か居ればこんなの連れてこなかったわよ。ねえ、そんなに透けてる？>

<いつそTシャツを脱いで歩いてれば意識操作ナシでも、大勢集まったのかもな>

<バカ>

<あはは、冗談だよ——都合六人か……何とかなるだろう>

「さあ、配置につくんだ」

カジの号令で、それぞれが等間隔に巻かれた荷締ベルトの前に立つ。

「よし、いちにのさんで持ち上げてそちらへどかそう。いち、にい

のー」

三の合図より早く、ジャージ姿——上着を脱いでＴシャツ一枚になっではいたが——の男が電柱の片側を持ち上げてしまう。慌てた全員がそれぞれのベルトに通した首に力を込め、顔を真っ赤にしてようやく電柱が持ち上がった。

「そのまま、そのまま——足の上に落とすなよ、骨なんか一発で碎けてしまうからな」

カジの声も掠れていた、それぞれが耐えていた重量はそれほどのものだったのだ。5 m 弱の距離を移動してゆつくりと電柱を下ろす。ベルトから抜いた首を大きく回しながら正が言った。

「ちよろいもんだ、1 t もなかったんじやないのか？」

「でも、あの鉄筋の量だぜ。それ近くはあるさ」

「じゃあ、あの人は……」

視線が集中すると照れくさそうな笑みを浮かべ「じゃあ」と言っ
てジャージ姿の男は走り去ってしまった。

<驚いたな……人工筋肉か、実用化されていたんだ>

<そんなものがあるの？ 今の人がそれを？>

<ああ、こういう仕組みだ>

網目SMA人口筋肉の概要を依子に送った。人間の筋肉並みの高伸縮率を維持しながら500MPaの応力を発生させることのできるそれは、冷感時の応答性の悪さはあるものの従来の導電性ポリマの弱点であった耐久性を解消する次世代の技術である。動作電圧に關してもかなり低く抑えられていたのだろう。上着を脱いでＴシャツ姿になった男がどこかに電源を背負っている様子もなかった。今しがた目にしたとんでもない筋力と不自然な動作は、そうとしか考えられない伊都淵だった。

<あの人も意識誘導をして連れてきたの？>

<いや、困ってる旨を話したら進んで力を貸すと言ってくれたんだ。震災でも傷めて治療されたのかな？ あの腕は……電柱を持ち上げた瞬間、大きな電位を感じたよ>

<脳波に？>

<……腕に……かな？　一瞬だったから、よく分からない>

「二人だけでわかってないで俺達にも教えてくれよ。何だったのさ？　今の人は」

二人が思考だけで意思疎通の出来ることを仲間達は知っている。

伊都淵は依子に伝えたのと同じイメージを正の意識に送りつけた。

「やつ、止めて……だめだってば、俺にはそんなの理解出来ないって。言葉で言ってくれよ言葉で」

意識をそのまま受け取ることに慣れていない正にとって、奔流を成して大量に届くイメージは、脳内に巻き起こる嵐のように感じられた。

「言葉にした途端、聴く側が構築するイメージは自身の理解の及ぶ範囲で形を成すものだ。イメージのまま捉えれば先入観に囚われることなく意思は伝達される。慣れてくれれば便利なものだぞ」

「無理だって俺には。なあ、何だったんだい？」

仕方なく伊都淵は説明した——言葉を用いて。

「じゃあ、さっきの人がその気になれば何十tの物も持ち上げられるってことですか？」

半信半疑で訊ねてくる雄一郎に伊都淵は人差し指を振って答えた。

「骨格——関節の許容量を超える重量は無理だろう。よく重量上げの選手が競技に失敗して関節や腱を痛めるのを見ないか？　それに質量が増えれば作動電圧も大きなものが必要になる。あくまでも失った部分を補填するものだと考えるべきだろうな」

「なんだ、やつぱりスーパーマンは漫画の話か……でも、蟻は自分の体重の何十倍ものものを運ぶって言わないか？」

力自慢の正には興味を惹かれる話題だったようだ。

「昆虫はあのサイズだからそれが可能なんだ。外骨格と内骨格の生物では実現できる体のサイズに大きな違いがあるからあくまでも仮定の話にはなるが。体長1センチの蟻が1mになったとしよう。質量はその3乗になるから100万倍になる。ところが発揮出来る筋

力は筋肉の断面積に比例しするから2乗の1万倍に過ぎない。予想値の100分の1となってしまう訳だ——これは中学生の時に習ってるはずだぞ」

「習ったような習わなかったような……」

「同じ電源を背負わされるならパワードスーツの方がいいだろうな。肉体に手を加えることなくスーパーマン並みの力持ちになれるんだから。勿論、靱帯や関節を傷める心配もない」

「パワードスーツって？」

「エイリアンの何作目かで主人公が乗っていたのを見たことはないかな？ アバターでも似たようなのが出ていた」

「はいはい、アレね。でもそれだと下りた途端、生身に戻っちゃうじゃん」

「だったら正君の体内に蟻の遺伝子導入でもしてもらおう知り合いの医師に頼んでやるよ、真っ黒でカチンカチンのボディだ。雄一郎君の左フックでもビクともしないぞ」

「へえー……いいかも」

どんな変化を創造したのか正しは夢見るような表情になる。

「あんたがそんな風になったら、すぐに別れるからね」

「あつ！嘘、嘘。人間で我慢するって」

正の変身願望を打ち砕いたのは、恋人であるかおりの一言だった。

プロローグ（後書き）

私の拙作をお読みいただき、ありがとうございます。この作品は P300A の続編にあたりますが、主人公・設定などは異なります。CHICE 以外の作品は同一の世界観で書いております。登場人物の出自・背景などは他作品を参照願えれば幸いです。皆様の忌憚ないご意見をお聞かせください。

宿舎

『試合終了です、これで仙台パイレーツは11連敗。完全にプレーオフ進出の夢が潰えた訳です。逆に東京ミリオンスはこれで優勝マジックが2となりました。解説の水落さん、如何でしたか？ 試合を振り返って』

『打てない、守れない、肝心なところでミスが出るでは勝てませんね。パイレーツも前半終了時点までは5割を確保していたんですが粘りに欠けるようです。地元ファンも今年こそは、の期待もあつたでしょうに』

テレビカメラはパイレーツベンチで樹脂製の水槽を蹴り飛ばす星屋監督の姿を映し出す。ベンチ裏へと引き上げる選手達の背中には心なしか丸まっているように見えた。カメラが切り替わりヒーローインタビューが始まろうとしていた。

「弱いな……全く」

ため息と共にテーブルを蹴飛ばしかけた自分の姿が星屋監督とダブって伊都淵は思い止まった。

「終わった？　じゃあ次、俺が観るからね」

「ああ、どうぞ」

テレビのリモコンを受け取った正がソファに体を沈める。私設ボランティアの彼等が宿舎として借り上げていたのは或る企業の保養施設だった。被災したそこは随所に手が加えられ何とか人が住める状態にはなっていたものの、割れたガラスがそのままにされた部分もある。ロビーに大は画面のテレビが置かれており憩いの一時を過ごす場所となっていた。但し、今そこに居るのは4人。テレビの前に陣取った二人と、その後ろで歓談する依子とかがおり。カジと雄一郎の姿は見えなかった。

「パイレーツなんか応援するだけ無駄だよ。観てて腹が立つじゃん――
ああ……もう始まっちゃってる？ 勝手にBKAA44？ あれ……

…みいちゃんは？ あつ、居た居た」

揃いのユニフォームに身を包んだ少女達でフレームが一杯になる。誰がなんとかちゃんなのかは伊都淵には皆目見当がつかなかった。

「いつもの学芸会かい？ これはこれで腹が立つけど見なきゃ済む話だからな」

「正は口リだもんねー」

伊都淵の嫌味もかおりの憎まれ口も耳に入らないようだ。正は食い入るように画面を見ている。玄関のチャイムが鳴ったがこちらも耳に入らないようで口は半開きとなっていた。

「誰かしら？」

席を立とうとした依子を制して伊都淵が言った。

「いいよ、俺が見てくる」

「あつ！ やつぱりここだった、良かったあ——探しました」

昼間のジャージ姿の男だった。雨でも降り出したのかな？ 濡れた男の髪からそんなことを思ったが、外は涼しげな夜風がそよいでいるだけだった。

「ああ、昼間の……その節はどうも——どんなご用向きで？」

「一緒にいらした方はボクシングの世界フェザー級チャンピオン鈴木雄一郎さんですね？ 彼にお願いがあつて伺ったんです」

だったら、あんなに忙しく去らなきゃ良かったのに……それとも後になつて雄一郎の顔を思い出したのだろうか——伊都淵は続けた。

「サインですか？ 生憎、雄一郎君はロードワークに出てまして…

…おっつけ戻ってくると思います」

「いえ、サインが欲しい訳では——そうでしたか……」

「入って待つてもらえば？」

知らぬ間に後ろに立っていた依子がそう言う。

<悪い人じゃないみたいだし>

<そうだな>

「どうぞ、殺風景なところですが」

「ありがとうございます」

招き入れた男の顔には汗の粒が吹き出している。濡れた髪といい、どこからかはわからないが走ってきたようだった。

「凄い汗だ。冷たいものでもどうですか？」

「いえ、結構です。実は僕もロードワーク中だったものですから」

この男もボクサーなのだろうか？ 雄一郎とは筋肉のつき方が違うように思えるが……首に巻いたタオルで顔の汗を拭い始める男は世に言う？イケメン？ではなかったが、強い意思を秘めたいいい面構えをしている。太い眉ときつく引き結ばれた唇を見て、伊都淵はそんな印象を抱いた。遠慮がちに立ったままだった男に椅子を勧める。かおりは目の端でちらちらと男を見遣り、正は昼間あれほど興味を抱いた男の来訪も気づかぬかのようにテレビに熱中していた。玄関が開いて雄一郎とカジが戻ってきた。

「疲れてくると左肘の角度が甘くなるクセは直ってないようだな、あれではリバーをとらえても力が逃げてしまうぞ。それと右クロス タイミングが悪い。身長差のある挑戦者だ。左ジャブに合わせて打ち下ろすつもりで行け」

「はい、気をつけます」

サウナスーツと呼ばれるゴム引きの上下からは蒸気が上がっている。雄一郎は玄関脇にかけてあったタオルを取ると頭からスッポリと被った。

「雄一郎君、お客さんだよ」

伊都淵の声に雄一郎がタオルの隙間から男に視線を振った。誰だろう？ といった不審さはすぐ笑顔に変わった。

「ああ、昼間の……俺に何か？」

「はい、突然お邪魔して申し訳ありません」

「そう、硬くならないで下さい。お見受けしたところ僕より歳も上のようですし……しかし凄い力でしたね、あれ」

その言葉が耳の届いたのか、訪ねてきた男が誰であるかに気づい

たよつで正が首を捻つて振り返つた。

「ああ、あのジン……重量上げでもやってらしたんですか？」

人工筋肉を口にしないだけの分別は、テレビに夢中になつていても失つてはいないようだ。

恐縮しきりの男だったが、雄一郎の気安い様子に安心したのか、堰を切つたように語り始めた。

「大変、不躰かとは思いますがお願いがあつてまいりました。チャンピオンは以前テレビで仙台パイレーツの星屋監督と対談なさつていましたよね？　今も親交がおりなら――

――無茶なお願いということは重々承知しておりますが、何とかチャンピオンからお口添え願えませんかでしょうか」

男のお願いというのはパイレーツの入団テストに関するもので、遠投と50m走の一次試験には受かる自信がある。しかし18歳と24歳という年齢制限だけは33歳の彼には如何ともし難いものだった。自分は必ずパイレーツの戦力になれる、なんとか星屋監督に投球を見てもらう機会を与えてもらえないだろうか。土下座をせんばかりに懇願を繰り返す男の背後でカジが伊都淵に目配せを送る。男の頭の中を探る。大きく？東北復興？が浮かび上がっていた。悪い人間ではない、との意味を込め伊都淵はカジに頷き返した。試合前のスピードガンコンテストで何とか球団の目に留まろうとしたが何度応募しても抽選に外れる。球場に足を運んで監督やコーチの出待ちを試みたが相手にもしてもらえない。そう語る彼が偶然顔を合わせた雄一郎に一筋の光明を見出したのは無理からぬことのようにだ。

二つに腰を折つたまま顔を上げない男に困惑の表情を浮かべ、雄一郎が伊都淵に訊ねる。

「今夜の試合はどうでした？」

伊都淵は大きく首を横に振つた。

「そうですね……では監督の機嫌のよさそうな時期を見計らつて電話してみます。但し期待はしないで下さい。あちらは超有名人、僕

は駆け出しのボクサーなんですから」

メジャー二団体のタイトルを無敗のまま統一したチャンピオンのネームバリューが、12球団もある島国のプロ野球チームの監督に劣るはずがない。雄一郎は自分を過小評価し過ぎるくらいがあった。「それで結構です、ありがとうございます。宜しく願います」男が差し出した名刺には肩書きも何もなく、ただこう書かれていた。？村山 一途 電話番号：080-●×68-678□？

その村山がバツが悪そうにこう続けた。

「お金はありません。紹介していただくお礼にボランティアを手伝わせてもらうというのではどうでしょう。毎朝ここに来ます」

雄一郎と並んだ姿を見てもせいぜい175cm程度の村山だ。正のような逞しさも見受けられない。そんな彼が、その主張通りパイレーツの戦力になれるのかどうか——いや、それ以前に星屋監督が彼の投球を見る気になるだろうか——それでも昼間見たあの怪力が根拠のない期待を伊都淵に抱かせていた。

入団テスト

「監督、今年の新人入団テストに期待するものは？」

「玉石混合ならまだしも石ばかりだったということもあるからな、期待は抱かなんことにしている。まだドラフトの前でトライアウトだつて残っている。支配下選手枠がある以上、面白いかな、ぐらいでは取れんよ」

「しかし、この参加人数は凄いですね。東京バーバリアンズの新人テストですら百名を超えることは滅多にありませんよ」

「それだけうちのレベルが低いと思われてるんじゃないか？ 万年Bクラスなんだから仕方ないといえば仕方ないことだがな」

プロ野球の新人選手入団テストというものは自信過剰の若者の夢を打ち砕く場でもあった。甲子園の常連校ともなれば新入生の過半数が中学やリトルリーグ時代にエースで4番を務めた者達で、それでもプロのスカウトの目に留まるのは、その中のほんの一握りだ。

首尾良くプロとしてのスタートが切れたにせよ、一軍に定着する能力と幸運を併せ持った者ともなれば最早天文学的確率でしかない。

『あわよくば――』程度の期待でテストに臨んだ若者が緊張で普段の力の半分も出すことが出来ず、一次選考で振るい落とされ肩を落として球場を後にする姿が初秋の風物詩ともなりつつあった。そもそも50m走6.3秒以内、遠投95m以上などといった選考基準は現役のプロ選手でもクリアすることが困難な数字なのだ。

自嘲気味に笑った星屋をスポーツ誌の記者や地元テレビ局が取り囲む。数が少なめなのはポストシーズンを戦う上位球団のゲームがまだ残っているためだ。

「FAでメジャーへ行く予定の藤村投手の後釜は、やはり早々に獲得を決めたデンゼル投手ですか？ 彼はメジャーでの実績もありますよね」

「クローザーはやはり右がいい、デンゼルは左だし外国人投手は投

げてみると分かん。開幕までじっくり様子を見て決めるさ」

「宮城スポーツの仙道です。監督はどうして右のクローザーにこだわるのでしょうか」

美人の女性記者の質問でなければ「勉強してこいっ！」と怒鳴りつけるところだったが、血圧が高く医者に興奮し過ぎないよう注意もされている。星屋はシーズン中とは別の顔で聞き返した。

「お嬢さん、スポーツ誌には最近移ってきたのかい？」

「はい、勉強不足で申し訳ありません」

「そうか、頑張りなさい。つまりこういうことだ。試合が1 - 0で勝っていて9回の裏、相手の攻撃が1アウト3塁、警戒すべきは先ずスクイズだ。走者を正面に見て投げられる右ピッチャーならバッターの動作を見てピッチアウトも出来る。それが理由だよ。もういいかな？」

頷く女性記者がどれだけ理解していたかは分からなかった。星屋はバッテリーコーチの西山に「一次選考が終わったら呼んでくれ、監督室にいる」と言っ、グラウンドに足を運ぶことなく奥へ引込んでしまった。

——鈴木君の頼みとはいえ、その……えっと、村山君だったかな？ 彼一人のために球場施設を使う訳には行かないんだよ、あれで結構な金がかかるものでね。年齢制限に目をつぶって入団テストを受けさせてあげよう——それでどうだろう？」

「ええ、充分です。ありがとうございました。ご無理を申し上げてすみません」

——いいからいいから、ただゴリ押しする私のメンツもある。せめて一次選考ぐらいは通過出来る選手であって欲しいものだ。それと暮れのタイトルマッチ——負けるなよ」

「最善を尽くします」

村山 一途、33歳、ポジション投手、黄金水産高校卒、黄金信用金庫野球部所属か……鈴木君にああはいったが硬式の経験もない

者が一次選考を通ることはないだろう。監督室の机に置かれた村山のプロフィールをくしゃくしゃと丸めると、星屋はゴミ箱に放り投げた。その時、ノックもなく監督室のドアが開き、西山が息せき切って飛び込んできた。

「どうした？ 一次選考が終わったのか？」

「ええ、それもありますけど……」

呼吸が整わないのか、次の句が出てこない。

「落ち着いて話せ。今年も一次選考で全滅か？ 今更驚きもしないかな」

何度も唾を呑み込んだ後、ようやく西山が言葉を発した。

「監督に頼まれて参加させた村山——あいつはバケモノです。遠投でホームプレートから5m後ろからバックスクリーンにぶち当てました。推定130——いや、140mは投げているでしょう」

ガタンと椅子を蹴立てて、星屋が立ち上がった。

「記者も見ていたのか？ それを」

「いいえ、体も人並みでジャージで参加の村山でしたから最期の試投にしておいたんです。100人を過ぎたところで合格者が一人も出ず、仙台福祉大の沢尻が逆指名を表明したらしく記者達はそちらへ……どうします？ ベースランニングを見ますか？」

「テストは中止だ、記者発表は合格者なしと言っておけ。人払いをして村山を屋内練習場に連れてこい。投球は俺が直接見る」

「わかりました」

星屋が屋内練習場に到着した時、村山はブルペン捕手相手に軽いキャッチボールをしていた。星屋をみると深々と頭を下げる。鷹揚に手を振ってウォーミングアップを続けさせ、西山の許へと歩み寄る。

「まだ、投げさせてなかったのか？」

「ええ、監督がいましてからと思い……」

「準備が出来たならキャッチャーを座らせる。そちらから知らせて

くれ」

「私はいつでも構いません」

星屋は連れてきた球団職員にスピードガンを用意させ、村山に声をかけた。

「始めてくれ」

「はい」と答える村山だったがスパイクも履いていない。あれで140mを投げたのか……150km/hをゆうに超えるストレートを投げるのだろうな——その期待に反して球団職員の持つスピードガンの数値は147、149、146と星屋の期待には遠い。速球派の部類には入るが、内転筋のトレーニングを導入し始めた最近のピッチャーならこの程度の球速は珍しくもない。スパイクを履かせプレートの使い方を教えれば5kmは増すだろうが——契約を済ませていた選手ではなかったが、いつものクセで星屋は激を飛ばした。

「どうしたっ！ 手を抜くのは百年早いぞ」

「はい」

151、152、150……やはり遠投140mから期待した数値には上がってこない。ポロポロこぼすキャッチャーにも星屋の苛々が募った。

「誰だ？ あのザルキャッチャーは。お前が代わってこい」

え……冗談でしょ？ といった顔で西山が見返すが、星屋は真顔だった。

「おい」

首を傾げながらプロテクターを外すキャッチャーに星屋の厳しい声が飛ぶ。

「アマチュアの投げる真っ直ぐが取れんようじゃ話にならん、来季の契約はないと思っておけ」

「150km/hで動くボールなんか、初めての私には取れやしませんよ」

「動くだと？」

交代した西山に目を遣ると、構えたミットをあたふたと上下左右

に動かした拳句、やはりポロポロこぼしている。村山に待ったをかけミットを外した手をブルブルと振っているのは突き指でもしたのだろうか。

「まったく、どいつもこいつも……」

現役時代さながらにエキサイトしてしまった星屋はバッターズボックスに立つと村山に向かってこう言った。

「三球勝負のつもりで投げてこい。俺が納得する球を投げられなければテストは終了、失格だ」

こくりと頷くと村山は初めて大きく振りかぶった。彼の手から放たれたボールは重力の法則を無視したような軌道で再び西山のミットをはじく。星屋の顔から表情が抜け落ちた。

「154km/hです」

球団職員の声が上がる。その数字より何より、ボールの描く軌道が信じられない星屋だった。

「ワンストライク……ですよね？」

マウンド上の村山が言った。

「あ……ああ」

目の錯覚ではないのか？ 投手ながら現役時代には3本のホームランを打っている星屋だ。軟式しか経験のない者に舐められてたまるかと、生来の負けん気に火が点く。

「ちよつと待て、バットを」

ちゃんと構えれば球道を見定めることが出来るはず、そんな思惑で球団職員からバットを受け取る。

「プレイ再開だ」

村山のテイクバックに合わせてタイミングを計る。強いバントを足元に返して脅かしてやろうと思っていた。ところがとらえたと思った瞬間、ボールは星屋の視界から消えてなくなる。ホームプレートのすぐ後ろでショートバウンドするとプロテクターなしの西山の腹部を直撃して星屋の足元に転がった。

「……イム、タイムだ。私はもう受けられません。キャッチャーを替

えて下さい」

四つん這いでキャッチャーボックスから這い出る西山だった。仕方なく先ほどのブルペンキャッチャーを呼び戻す。

「どうです？ バントでも当たらないボールなら受けなくても当然でしょう？」

ブルペンキャッチャーの意趣返しに返す言葉が見つからず顔を紅潮させて怒鳴りつける。

「うるさいっ、勝負はまだ一球残ってる」

「納得はしとらんぞ、この程度なら3Aにゴロゴロしとる。33歳にもなつてプロのピッチャーを指すなら俺の度肝を抜くぐらいのボールを投げてみる」

これは村山に言った言葉だ。実は既に度肝を抜かれていた星屋だったが、どこの馬の骨とも分からぬ男に舐められたままではプロの沽券に関わる。自身を鼓舞する意味でも強気の発言を続けた。

「最後です」

村山はセットポジションに入った。何故、わざわざ球威の劣るセツトになどするのだ？ コントロールの正確さでも披露しようというのか――そんな星屋の思惑を村山の投げた最後の一球が強く打ち碎いた。真ん中低め辺りへの軌跡を描いたはずのボールはキャッチャーミットとマスクをはじき、分厚いクッションラバーの貼られた壁に轟音と共にめりこむ。それがポトリと落ちるまで声を上げる者は誰一人として居なかった。星屋はバッターズボックスで尻餅をつき、キャッチャーは仰向けに倒れたまま。ボールの行方を見ていたのは唯一離れた場所で様子を見守っていた西山だけだった。

「ひゃ、ひゃ、167km/hですっ！ あれ？」

スピードガンを構えた球団職員もボールと表示窓に集中していたため、何故星屋とキャッチャーが倒れているのかが分からない。

グローブを外し右手を抑えている村山の様子がおかしい。西山はマウンドへ足を運んだ。

「どうしたんだね？」

「ストレートは一日二球が限度なんです。遠投の時は加減してましたけど、今はつい監督さんの挑発に乗ってしまっ……」

広げた右手、人差し指と中指の付け根付近が赤く腫れ上がっていた。だが西山が驚いたのはそちらではなく村山の話す言葉だった。加減していただと？

「じゃあ、さっきまでどうやって投げていたんだね」

「リリースの瞬間、こうして掌で押し出すようにして――投げている僕にさえ予測のつかない変化はそのせいでしょう。指先を縫い目にひっかける普通のストレートは負担が大き過ぎるからと医者に止められてまして――多分、もう一球で指が折れていたかも知れませんが」

確かに医師には診せていたが、それが投球のせいであることまでは話していない。指にかけた時の痛みの激しさから村山自身が導き出した結論だった。

正気を取り戻した星屋が、二人の会話を訊いてあんぐりと口を開く。未だ立ち上がれないまま、その開いたままの口でこう怒鳴った。
「三球で指が折れるストレートだと？ 150km/hのチェンジアップだと？ そんなものは見たことも聞いたこともないぞ」

「今のがそうでしょうか」

驚愕に監督への敬意を忘れ、西山がそう指摘する。ガバっと体を起こした星屋が大腿でマウンドに歩み寄った。

「契約だっ！ クローザーは決まった」

「しかし誰が受けられるんですか？ あんな球……」

西山の問いに答えたのは村山だった。

「ランナーを懸念されるなら、既に対策は練っております。実は……」

声を潜める村山の話に星屋と西山は聞き入る。そして呆れたようにこう言った。

「本当にそんなことが出来るのか？」

「ええ、例え刺せないにせよキャンバスに釘付けにしておければい

い話です。ノーリードではリッキー・ヘンダーソンでさえ盗塁は不可能だと思っただけです」

ふうむと、顎に手を当て星屋は考える表情になる。

「よし、それも併せて見せてもらおう。明後日もう一度来てくれ。

契約もある、印鑑と銀行の口座を忘れずに」

「はい」

直立不動の姿勢で答える村山の顔には満面の笑みが浮かんでいた。

「たまげたな……在野には、まだあんな原石が眠っているものなんですね。早速、支配下選手登録の手続きをさせましょう」

「それはまだ早い。秋季キャンプに行っている主軸を呼び寄せても一度テストする。あいつの言ったランナー対策も見ておきたいしな」

「契約だ、とおっしゃったじゃないですか」

「勿論、契約はするさ。ロジャー・クレメンスの球威でチェンジアップを放る男など二度と出てきやしないだろうからな。登録をしないのは考えがあつてのことだ。どうせ新外国人が使い物にならなかった時のために枠は残してあるんだろう？ いいから俺に任せろ」

「キャッチャーはどうします？ あんな球をうちで捕れるとしたら

……」

「ダンプぐらいしか居ないだろうな、あいつの言うとおりランナーをベースに釘付けにしておけるなら肩の弱いヤツでも問題ないだろうさ。そもそも、誰があんなボールを打てるんだ」

「おっしゃる通りかも知れませんが……しかし、よくあんなのを見つけてきましたね。年齢条件を彼に限って外したのは監督の差配だと伺っています」

一次選考も通らないようなら知らぬ顔を決め込み、使い物になりそうだったら自分の手柄にすればいい、と星屋は村山が雄一郎の紹介であることを誰にも知らせていなかった。野球人としての才能は

もとよりプロ野球界における政治的手腕にも長けた星屋には、いずれどこかの球団社長に収まろうといった野望がある。安い賃金で素晴らしい成績を残せる選手ばかり集められればそれに越したことはない。夢と興奮を売っているようでも球団経営はビジネスなのだ。「普段からアンテナを張り巡らせておけば、こんなこともあるということだ」

そう囁く星屋の脳裏にあったのは――他に紹介できる選手がいなか鈴木君に訊ねてみよう――だった。

急なテスト中断でスタジアムから追い出された雄一郎達は、村山が屋内練習場から出てくるのを今や遅しと待っていた。遠目に仲間達を見つけた村山が両手で大きく丸を作った。

「やったー！」

飛び上がって喜ぶ男達をよそにどこか不安げな表情の依子だった。

伊都淵が訊ねる。

<どうした？ 仲間の門出だぞ、もっと喜んでやる気にはならないのかい？>

<村山さんの合格はあたしも嬉しいわ、でも……>

<でも？>

<陸上競技なんかでもあるじゃない、ドーピング検査に引っかかって失格になったとかいう裁定が。野球には詳しくないけど彼のあの腕はルール違反なんじゃないの？>

<ルールには則ってはいても金にあかせて他球団の四番とエースを集めるチームのモラルはどうなんだ？ 大地震に原発事故にと不遇続きだった東北だ、一つぐらいいいことがあったっていいじゃないか。それに……>

<それに？>

<いや、何でもない。とにかく君が心配するようなことにはならない。近いうちに磁気作用の原理を教えるよ>

<磁気作用？ それが村山さんとどんな関係が？>

<それは君自身で学ぶんだ。意識の共有は錯覚をも共有してしまうことになる。俺が間違っていた場合、君にも間違った知識を植え付けてしまう危険は避けたい>

<あなたが間違うはずないわ>

<自慢じゃないが俺はちよくちよく判断を間違ってるよ。まあいい、今は村山君の合格を祝おう>

小首を傾げる依子をその場に残し、伊都淵は歓喜の輪へと入っていった。

旅立ち

その歳の暮れ、日本における格闘技の殿堂と呼ばれる会場で、世界フェザー級タイトルマッチ——雄一郎の防衛戦は行われた。私設ボランテニアの仲間と共に招待を受け、リングサイドから眩い光芒の中に立つ雄一郎を見上げる村山の胸中には或る期待があった。雄一郎君がKOで勝てば自分もきつとやれる——己を信じることで試合に望む自信を高める——そう言った雄一郎の言葉の中に村山のおかれた現在と通ずるものを感じ重ね合わせていたのだった。

1ラウンドのゴングが鳴り、慎重に間合いを詰める雄一郎とランキング一位の指名挑戦者。どちらも無敗同士の対戦だった。中学生時代、カジにその才能を見い出され？練習は裏切らない？の信念のもと、ストイックにボクシングを追究してきた雄一郎だった。左へ回りながらジャブで距離を計る。片やメキシコの貧民街の出身で、ボクシングでしか成り上がる術のないことを自覚していた挑戦者。その目に宿す光は飢えた野生の怒りがあった。雄一郎のジャブを汚らわしいものであるかのように乱暴なパーリングで払う。苦戦するのかな、村山がそう思った刹那、挑戦者はマットに沈み込んでいた。クリーンヒットすれば確実に肋の数本は持つてゆく雄一郎の左フックを警戒し過ぎたのだろう、彼がスイッチしたのにも気づかなかったようだ。軽く出した雄一郎の右のショートストレートがカウンター気味に挑戦者の顎先をとらえると、脳を揺らされた挑戦者は完全に平衡感覚を失って尻餅をついた。カウント7で立ち上がったものの、笑う膝がよく絞り込んだ125パウンドの体重を支えきれない。ロープにもたれかかったまま続けられるカウントを聞いた挑戦者は、レフリーが手を大きく交差させた瞬間、がっくりと頂垂れてキャンバスに膝をついた。

試合開始から1分17秒、なんとも呆気ない幕切れだった。勝者のコールを受けた雄一郎が、グローブをはめた手を客席に向かって

ぐつと差し出す。スタンディングオベーションを贈るファンは、それが自分に向けられたものだと思ひて疑わぬ。歓声が一段と大きくなつた。村山はそのメッセージをこうとらえた「俺に続け」と。

「あの球団はシブちんだとは訊いていたけど、随分と叩かれちゃったもんだな」

契約書の控えを手に伊都淵が呆れたような声を上げる。支度金300万円、年棒の220万円は、支配下選手として登録した時点でそれぞれ契約金1000万円と年棒500万円と変更されるという条件だったが、パイレーツの戦力になることが目標だった村山にとって金額は問題ではなかつた。

「食べさせなきゃいけない家族も居ませんし、遠征の時は交通費も食事代も球団持ちですから。契約金はお世話になつたここに置いて行くつもりです。ガレキ撤去の資金にでも役立てて下さい」

「気持ちはあるがたいがスポーツ選手は体が資本だ。公傷扱いにならない怪我は自己負担になる。幸い、ここは伊都淵君のお陰で金には困っていない。それは持つていなさい」

「そうそう、こう見えて俺には金儲けの才覚があつてね」

カジの発言に軽い調子で伊都淵が言い添える。背後で洗濯物を畳んでいた依子がクスリと笑う。

「しかし私はここにおいていただいた間、部屋代も食事代も払つていません。みなさんのお陰で念願叶つてパイレーツに入団することが出来たんです。他にお礼をする方法も思ひつきませんし……」

村山が避難所暮らしだったことを知つた伊都淵が、企業の保養施設を借り上げて宿舎にしていたここにほぼ強制的に住まわせたのだつた。

「君は労力で充分購つてくれた。年棒500万は世間一般のサラリーマンと比べても決して高い数字ではない。専属のトレーナーなどを雇えばすぐに足が出るぞ。いいから金は持つていなさい」

カジに強く諭され、やっと村山は提案を取り下げた。

ボランティア集団にも休暇は必要だ。雄一郎と正、かおりの三人は作並温泉へと出掛け、私設ボランティアの事務所兼宿舎には村山を含め4人だけという静かな午後だった。

「昨年5位のパイレーツはいきなり埼玉へロードって訳か……登録は開幕当日の明後日になるんだろ？ オープン戦も練習試合の登板もなしでぶっつけ本番で大丈夫なのかい？」

「ええ、僕を秘密兵器にする予定と監督は言っておられました。だから支配下選手登録も一軍登録もギリギリにするのだと。どうせど真ん中狙って放り続けるだけです。連係プレーは屋内練習場で嫌というほどこなしました。緊張する性分でもないですし、みなさんの期待を裏切ることはないと思います。背番号も69がもらえます」

村山がサラリと言った言葉は、軟式野球しか経験のない男ではなかなか口に出るものではない。彼なりの自信の現れだったのだらう。

「秘密兵器の割りには重い番号だな……まあシーズンが終われば、年棒も背番号も見直さざるを得なくなるさ。頑張ってこいよ、仙台駅まで送ろう。買い物に行くなら君も一緒にどうだい？」

伊都淵は依子に声をかける。

「じゃあお願いしようかしら。支度してくるわ、十分待つてて」

「仙台ボーイにナンパされないよう、化粧は控えめにするんだぜ」

「十分じゃ眉毛しか書けないわよ」

「はは、それもそうだ。さあ村山君も荷物をまとめろ」

だが村山は「はあ」と答えたまま席を立つ様子はない。

「どうした？ やはり多少は気後れするものがあるのか？ あの雄一郎でさえ試合前は毎回膝が震えると言っている。プロ初参戦の君がそうでも何の不思議もないぞ」

珍しくカジが軽い調子で言った。

「そうじゃないんです。僕はここへ出て行かないといけませんか？ 仙台でのホームの試合の時とか、ここから通ってはいけませんか？」

？」

カジと伊都淵は顔を見合わせる。

「いけなくはないが、君が有名になればここにも記者達が押し寄せる。彼等に遠慮会釈などないから地元の方々に迷惑がかかる。それは君にとつても不本意なのではないかな」

「そうですね……」

カジのやんわりとした拒絶に村山は視線を落とした。

「ネピアスタジアムの近くにパイレーツファンの叔父さんが居るんだろう？ コンディション維持のためにも市内に住んだ方がいいよ。デーゲームは無理でもナイターはみんなで応援に行く。俺達が仲間を忘れると思うかい？」

「そんな心配をしているわけではありません。では、野球を辞めることがあれば戻ってもいいですか？」

「おいおい、これから人生の晴れ舞台に立とうって男がもう引退の話か？ 弱気過ぎるだろう。それに……」

言葉を続けようとする伊都淵をカジが遮った。

「戻ってきたければいつでも歓迎する。但しシーズン中はだめだ。君がここを気に入ってくれているのは嬉しいが球団から報酬をもらう以上、君の主戦場はマウンドだ。シーズン中に軽い気持ちでボランティアに臨んで怪我でもしたらどうする？ そして我々にもなすべき事がある。ここには現役世界フェザーチャンピオンの雄一郎が居て、所属チームの政治的戦略でシート争奪戦に敗れはしたものの返り咲きを狙っているグランプリライダーの正も居る。目端の利くライターがそれに気づけば何度追ひ払っても齧り付いてくるだろう、それは我々の本意ではない」

口にせずともそういうカジ自身が世界を囑望された天才ボクサーだったことも伊都淵から訊いて知っていた。あれだけ世話になった上に迷惑はかけられない。反論の余地がないことを知った村山は荷物をまとめて部屋へと向かった。

「多少、クラウドディングの傾向があるようですね。避難所生活の影

響でしょう」

「ああ、ただ彼も一人前の男だ。いつまでも君の庇護下においておく訳にも行くまい。取り除いてやれそうかな？」

「私にそんなつもりはありませんでしたが……治療は依子にさせます」

「彼はいつかここに帰ってくるのだろうか？」

誰にともなく呟いたカジの問い掛けは答えを求めているものではなかった。

「開幕3連戦はデーゲームか、残念だな、アレを見たかったのに……と、いつでも9回の頭からいけばそんな機会はないか」

「伊都淵さんに教えてもらわなければ僕がアレに気づくことはありませんでした。何でしたら、ホームのナイターまでとっておきましようか？」

「カジさんが言っていたらう？ 報酬を受け取る以上、チームのために全力を尽くせと。スポーツニユースでも見せてもらうよ。それと俺の思いつきを現実に出来たのは君の能力あつてのことだ。変な義理を感じる必要はないさ」

「はあ……」

「メジャーリーグに42歳でルーキーデビューしたサチエル・ペイジというピッチャーがいる。知ってるかい？」

「42歳！ そんな歳ですか？」

プロを志しそれが叶ってプロに入ってくる選手達が意外にプロ野球事情に疎いことは知られている。少年時代より野球漬けの毎日でテレビでの観戦や球場に足を運ぶ時間などないのだろう。それが1948年、彼が生まれる30年以上も前の出来事なら知らなくて当然だ。伊都淵は続けた。

「ああ、ニグロ・リーグで2000勝、ノーヒットノーラン55試合という伝説のピッチャーだよ。9インングで28奪三振なんて嘘みたいな記録も持っている。かつてメジャーリーグにはカラーライン

つてのがあった。平たく言えば人種差別だな。つまり白人至上主義で全盛期の彼とベーブ・ルースの対戦を見損なっただから奴等も損をしたもんだ。スピードガンのない時代だから信憑性には欠けるが170km/hを投げていたとも言われている」

「2000勝ですか——バケモノみたいな人だったんですね」

ほんの一瞬、伊都淵が顔をしかめたように見えた。村山が続ける。「僕が最年長ルーキーになると思っていました」

「日本だと……えっと」

伊都淵は脳内ウィキにアクセスする。

「1950年、毎日オリオンズの湯浅貞夫さんが47歳での選手登録になってるな。まだアマチュアとの境界が曖昧だった頃だ。消化試合1試合きりの登板だから参考にはならないな。同じくその年、松竹ロビンスの大岡虎雄さんが37歳での入団となっている。こちらは野手で？水爆打線？と呼ばれたクリーンアップを形成したそう。いずれにせよ戦後間なしの選手が圧倒的に少ない頃の話だよ。君が日本のサッチモ（サチエル・ペイジの愛称）になってやれ」

「いつもながら伊都淵さんの博識には驚かされます。一体、頭の中はどうなっているんですか？」

村山は目を丸くして訊ねる。

「頭蓋の中には一般人に比べてやや小さめの新大脳皮質があり、間脳、中脳、小脳と欠損なく揃っている。視床下部付近に僅かな夾雑物があるようだが機能はすこぶる正常だ」

視線を前方に向けたまま真顔で語る伊都淵だったが、ほどなくして横目でウィンクを送ってきた。ようやくジョークだと理解した村山は声を上げて笑った。

伊都淵の駆る白いRV車は仙台南部道路を下り、ネピアスタジアムへと向かっていた。

<終わったかい？>

後部座席の依子へと意識を送る。

<ええ、村山さんはあなたの話に夢中になっていたみたい。意識操

作には何も気づいていないと思うわ。でもプロ野球選手の遠征ってホテル住まいなんでしょう？ クラウディングの影響を心配する必要があるの？>

<機械設計と医療機器販売の経験しかなく、今やプロのボランティアになってしまった俺にプロ野球選手の宿舎がどうなっているかまでは分からないよ。ただ、彼は今後行く先々で人々に囲まれ揉みくちゃにされる。それが原因で持てる力を発揮出来ないのは気の毒だと思ってるね、それで君に頼んだんだ>

<あなたなら、もっと上手く出来たでしょうに>

<作られた俺が他人の意識に介入するのは最低限にしておきたい、いつもそう言っているだろう？ 君が神に遣わされたセラピストだとしたら俺は偽医者なんだよ>

<まだ、そんなこと言ってる>

<長く話さないでいると村山君が怪しむ、この話はいずれまた>

そこで思考を閉ざした伊都淵に、依子は渋々従った。丁度そのタイミングで村山が言葉を発する。

「ここで結構です。全体練習はプレスに公開してますから僕は屋内練習場に直行です。歩いて体を温めておきます」

「そうか、じゃあここでお別れだ。応援してるぞ、しっかりな」

施設ボランティアの仲間から饒別に贈られた真新しいスニーカーを荷室から出した村山はドア越しに握手を求めてきた。依子ともしっかりと握手を交わし車を離れて歩きだす村山だったが、名残惜しそうに何度も白いRV車を振り返っていた。

<そういうことだったのね>

<分かったろう？ 彼は心配ない>

<ええ、あなたも間違っていることがあるのね。安心したわ>

<しょっちゅうだって言っただろう？ 元来、俺は平凡な男なんだよ>

伊都淵は車を市街地に向かって発進させた。

初登板

埼玉ビッグベアーズとの開幕戦は、初戦がパイレーツのエース大隈の完封シャットアウト、二戦目は若きエース候補田上が序盤で大量失点をして大敗と村山の出番はなかった。迎えた三戦目、四番荒井の満塁ホームランなどで6・3とリードした9回裏、クローザー候補の一人だったデンゼル投手をマウンドに送り出した星屋監督だったが、オープン戦から修正出来ずにいた制球力不足にエラーが絡んで2失点、なおも2アウト2・3塁と一打サヨナラの場合で、ようやく村山に登板のチャンスが廻ってきた。ベンチ入りメンバーに名前だけは連ねていたもののオープン戦はおるか紅白戦での登板もない。テレビ中継のアナウンサーの許に届いた資料も簡単なプロフィールだけという有様だった。

「村山 むらやまかずみち 一途33歳、174cm、64kg、右投げ右打ち、背番号68、黄金水産高校から黄金信用金庫……ですか。ご存知ですか？ 黒岩さん」

困ったアナウンサーが解説者に助け舟を求めた。

「開幕当日に支配下選手登録即一軍となっていますね。オープン戦も登板なし……僕はてっきり偵察要員か何かだと思っていましたよ。33歳のルーキーか——これって日本記録じゃないですか？」

「ちょっと待って下さい……記録によりますと——」

アナウンサーは中継スタッフから手渡されたメモを読み上げる。

その内容は伊都淵が村山に語って訊かせた通りのものだった。

「一リーグ制だったその頃ならともかく、この時代に33歳のルーキーですか……秘密兵器ってヤツなんでしょうか？」

「実戦経験が全くない訳でしょう？ 漫画じゃないんだ、そんな奇策が通用するほどプロは甘くありません。体格も一般人とさして変わらない、秘密兵器は秘密兵器でも『出来ればずっと秘密にしておきたかった兵器』ってことにならないよう祈ります」

使い古されたジョークに手を叩いて自画自賛する黒岩だった。

「キャッチャーも代わるようですね、背番号52辻捕手が出てきました。何ですか？ あのでかいキャッチャーミットは」

黒岩はモニタ画面を覗き込む。ベンチから走り出てきた。ダンプという愛称そのままの短軀のキャッチャーを呼び止め、アンパイアが彼の持ったキャッチャーミットを両手にとって眺める。記録員を呼んでサイズを測らせるようだった。ウェブは広く深くサイズも15・5インチ以下という規定いっぱいの特注されたそれは小柄な辻捕手が持てば分厚い座布団を二つ折りにして抱えているようにも見えた。

「ウケ狙いのファンサービスならホームゲームのインターバルでやって欲しいもんですね、一打サヨナラの場面の緊張感が薄れますよ」

黒岩はやや慚然とした物言いになる。村山のウォーミングアップが始まりマウンド周辺に集まっていた野手が守備位置に戻る。三塁手の荒井が村山を指差して何事か塁審に話している。セットポジションから2、3球、キャッチボール程度の投球をしてアンパイアに「もう結構です」と、プレイ再開を申し出た。

なんだ、あのウォーミングアップは……ナックルボーラーなのか？ ビッグベアーズの大城監督は首を捻る。スコアラが何のデータも持っていない投手が登板するなど前代未聞のことだった。とにかくホームプレート上を通過する球は全部振ってゆけ、と言ってバッターを送り出す。俊足の三塁走者都築にはゴロG.Oのサインを出してあった。

プレイツ！主審のコールで村山がセットポジションに入る。すると離塁する三塁走者を見据え一度プレートを外した。ランナーは歩いて三塁キャンバスに戻った。

「緊張してるんでしょうね。実践経験なしの初マウンドがサヨナラの場合では無理もない。ストライクが入ればいいんですが。なにせあの体では——」

プロ選手としても大柄な部類だった黒岩は、体のサイズイコール

選手のパフォーマンスと信じるきらいがあり、このような発言が多い。彼の中では村山が打たれるか自滅するかが既に既定路線となっているようだった。三塁手から返されたボールを受け取った村山が再びセツトポジションに入った時、中継スタッフの女性に飲み物を頼もうと、黒岩は一瞬グラウンドから目を逸らす。

アウトツ！ ゲームセツト！ 声高に叫ぶ三塁塁審の須藤と呆然と立ち尽くす三塁走者、観客にも何が起こったのか分からなかったようで、パイレーツファンの陣取るレフト側スタンドからも歓声は上がらない。ただ、小さなざわめきのみが球場内を包んでいた。
「隠し球でしょうか——いや、ピッチャーはセツトに入っていましたよ」

「すいません、見ていませんでした」

一塁側ベンチからは大城監督が走り出して三塁塁審に詰め寄る。

「プレートを踏んでいたろう？ 隠し球ならボークじゃないか」

「牽制球です。ランナーが戻れずタッチアウトです」

リーグから報酬を得ている日本の審判員は監督の抗議に対して若干弱腰のところがある。しかし予め三塁手の荒井に「よく見ていて下さい」と言われた須藤塁審はボールの所在も村山の牽制動作にも注意を払っており、見たことのない牽制球に驚きながらも自信を持ってアウトをコールした。

「そうなのか？」大城に確認された三塁コーチャーが渋面で頷いた。
「スロービデオが出ます、ここですね。……え？」

放送席の黒岩が失態を取り戻すかのようにモニタを食い入るように見つめる。セツトポジションに入った村山は左足を三塁に向け真っ直ぐ踏み出しながら右手に持ったボールを手首だけで弾くように荒井に投げていた。一見、ソフトボールの投げ方のようにもあつたがテイクバックなしで彼の手から放たれたボールは、投手がバッターに投げるものと遜色ないスピードで荒井のグローブに収まる。ランナーのリードが大き過ぎた訳でもない。有り得ない動作からの有り得ない速さの牽制に啞然とし、ほんの1mほどが帰塁出来なかつ

ただ。タッチされたランナーのぽかんと開いた口がそれを物語っていた。

中継画面と同じものがスコアボードの大型ビジョンに映し出されると、レフト側のスタンドから大歓声と？村山コール？が起こる。塁審の説明をそれで確認した大城監督も引き下がらざるを得ない。「狐につままれたみたいだ」とボヤキながらグラウンドの土を蹴り上げた。

三塁ベンチの前ではパイレーツの歓喜の輪が出来ていた。星屋監督に肩を叩かれる村山、ハイトッチでベンチに戻ってくる選手を迎える面々そして数名の選手が村山の牽制動作を真似て笑い合っていた。

「あんな具合に牽制が出来るものですね、黒岩さん」

「いや……普通の投手には無理でしょう。村山……君ですか？ 彼は手首を返すだけであんな速い牽制球を放っています。野手のスナップスローというのがありますが、あれだって体の回転と肘のしなりを使って初めて正確で素早い送球が可能なんです。異様に手首が強いんでしょうか——それにしてもあんな投げ方でよくコントロール出来たもんだ」

「えー、打者への投球をせずにセーブ——所謂0球セーブとなりますと1981年、当時南海ホークスの三浦投手以来ですね。この時は一塁走者を牽制でアウトにしています」

実況アナウンサーは再び中継スタッフから手渡されたメモを読み上げる。

「2リーグ分裂後最年長ルーキーの0球セーブ、おまけに前代未聞の牽制球と記録尽くめのビッグベアーズ対パイレーツの第三戦でした。ヒーローインタビューが始まるようですね。村山投手が出てくるんでしょうか、あ……荒井選手のようにですね。聞きましょう」

「放送席、放送席、今日のヒーローは第2号ツーランホームランを含む3打点の荒井選手です。お見事でした」

「ありがとうございます」

「開幕三連戦で2ホームランに打点7。大活躍ですね」

形通りのヒーローインタビューにレフト側スタンドに陣取った応援団は歓声を上げるが、イマイチ盛り上がりには欠けるようだ。おそらく誰もが9回3アウト目となったマジックのような牽制球の種明かしを望んでいたのだろう。

「ところであの牽制球、あれは事前に打ち合わせていたのですか？」
球団広報を振り返った荒井は、彼が頷くのを見てからゆつくりと口を開いた。

「この時代ですから、すぐに各球団にビデオが届きます。いつまでも秘密にしておけるものでもないでしょうから話します。スタンドのお客さん、知りたいですかー」

荒井の呼び掛けにライト側スタンドに残るビッグベアーズの応援団までもが拍手で応じてきた。

「あれはシーズン前に練習を重ねてきたプレイです。とはいえ僕が受けることが出来なかっただけで、村山は入団当初からさっきのような正確な牽制球を投げていました。塁審の方が見落とすことのないよう、それとボールクと判断されないよう予めピッチャーの動作を注視するようにお願いはしておきましたけどね」

「その村山投手ですがどんな経歴の持ち主なんでしょう。こちらには何の資料もないものでして」

「あまり自分の事を話したがないヤツでしてね。まあいいじゃないですか、野球で判断してやって下さい。あいつが投げる度、皆さんを驚かせること請け合いです」

思わせぶりの荒井の発言に再びレフト側スタンドから歓声が上が
る。

「今日みたいなトリックプレーがまだ他にも？」

「それは彼の登板を楽しみにしてして下さい。僕の仕事は打って打点を上げ、最終回にリードを保って村山をマウンドに送り出せるようにすることです。テレビをご覧の地元ファンの皆さん、明後日はネピアスタジアムの開幕戦になります。多くの皆さんに球場に足を

運んでいただき、応援をお願いしたいと思います。がんばっペー東北――」

チームキャプテンがそう締めくくると応援団は拍手と鳴り物で呼応する。ベンチ裏では勝利監督インタビューが始まるうとしている。上機嫌な星屋の顔が映し出された。

「おめでとうございます。ビジターでの開幕三連戦、2勝1敗の勝ち越しとなりましたね」

「ありがとうございます。選手がよくやってくれました」

こちらも先発投手の出来と中心選手の活躍に触れる形通りのスタイルで始まった。しかしインタビューの様子には興味の対象が村山であることがありありと伺える。星屋にも聞かれるのを待っているような感があった。

「ところで0球セーブとなった村山投手、オープン戦も練習試合でも登板がなかったのは秘密兵器だったと考えてよろしいのでしょうか？」

「デンゼルの調子が上がってきませんでしたからね。実は村山をクローザーにすることは開幕前からの既定路線でした。長いシーズンです。ダブルストッパーという構想も踏まえて戦ってゆきますよ」
新戦力をベールに包み続けたことへの返答はなかったが否定もしない。想像にお任せしますといったところだろう。

「次回の村山投手登板はやはりランナー三塁といった状況になりますか？」

「あいつを牽制だけのピッチャーだと思われたら困ります。シーズンを通して上に居れば最優秀救援投手だって狙える、いや、セーブ記録を塗り替えるかも知れません。この先は企業秘密、今後のパイレーツの戦いを見ていて下さい」

星屋は口チャックの動作をしてカメラの前から姿を消した。

これで暫くは観客動員も見込めるだろう。先発は揃っているし抑えの目処もついた。打線次第ではあるが優勝だって夢じゃない。両リーグ通じて選手年俸合計の一番低い球団の優勝か――面白いじゃ

ないか——ひとりほくそ笑む星屋だった。

「すっげー、これタツキーが教えてやったんだろ？」

テレビのスポーツニュースを観ていた正は興奮を隠しきれない様子でそう言った。

「だからタツキーは止めるってば。教えたと言えばその通りなんだけど、村山君だから実現できたプレイでもある。次回から三塁走者はベースに張り付いたままになるだろうしこれっきりだよ」

「え？ もう一つあったじゃん、あれはボークとかになるのかい？」

「しーっ、壁に意味ありだぞ。135試合を戦い抜くペナントレースだ。戦略つてもものもある、星屋監督が村山君の起用をどうするかだよ。見せなくて済むものはギリギリまで仕舞っておく。例年みたいに打線が途中で息切れすることがなければ……」

「なければ？」

「あるぞ、優勝も」

朝の早い私設ボランティア集団の宿舎、ロビーに残っているのは正と伊都淵の二人だけだった。

「そっかあ……俺も負けてらんないな。来年こそはワークスチームのシートを奪い返してやる」

「その意気だ。俺は先に寝るからな。戸締り宜しく」

「あいよー」

しかし、すげえなムラさん——呟く正を残し、伊都淵は階段を上がっていった。

真価

第二節、札幌ファイヤーズを地元ネピアスタジアムに迎えての三連戦もデーゲームで行われる。村山が唯一心を許す仲間達が観戦にきてくれることは期待出来ない。仙台でのナイターは四月の中旬、第七節までないと訊いている。

合流して日の浅い村山だった。チームメイトも球団スタッフも早く馴染めるよう、色々配慮はしてくれる。監督の方針で全体練習の参加機会がなかったため、教育係には捕手の辻が指名され開幕三連戦のホテルでは同室となった。打者心理やピクオフプレイの講義を、球界のよもやま話を混じえて語る36歳のベテラン捕手は陽気な男だった。ただ村山が地元仙台区の出身だと知るとやはり震災や津波が話題に上る。それが好奇心によるものではないにせよ、本人にとつては思い出したくない記憶でもある。何も訊かず全て知り尽くしたかのように――まるで旧知の友人を迎える自然さで受け入れてくれたボランティアの仲間達――たった四日前に別れた彼等と過ごした日々が如何に貴重なものだったのかを改めて感じる村山だった。

「叔父さんのところへ行ったらどうだ？」そんな伊都淵の勧めには従わず、球場近くのビジネスホテルを定宿にすることにした。シングル―泊朝食付4800円のそこが年俸500万円の自分には相応しいと思えたからだ。体格も一般人と変わらず、まだ顔も売れていない。気づかれることはないだろうと考えていた。

「契約金1億、年俸1200万の高橋は自信喪失でファームの試合にも出てないんだって？契約金泥棒もいいところですね」

「期待が大き過ぎたんだろう、あのまま潰れちまわなきゃいいんだけどな」

ブルペンの裏でバッテリーコーチの西山とセットアップの中根

が話していた。走攻守三拍子揃った即戦力との触れ込みでドラフト1位入団をした大学N.O.1外野手のことのようなのだ。彼は若い、一度どん底まで落ちてしまえば後は這い上がるだけだ。ちょうど去年の僕のように――村山の胸中をよぎるのはそんな思いだった。

先発が早い回で降りてしまえば忙しくなることも、裏ローテの一番手、フランクリン投手の出来が良く5回までファイヤーズ打線を1安打無得点に封じ込めていた。入念なストレッチを続ける村山に中根が声をかける。

「お前はヤツの契約金の10分の1、年俸も3分の1なんだろう？」

「ええ、そんなところですよ」

「監督の言うとおりセーブ王（最優秀救援投手）でも取るような一気に十倍増も夢じゃないぞ、いいなあ若者は可能性があつて」

「それ以上の年俸をもらつてるお前が言う台詞かそれが。それに村山はあまり若くもない」

返答に困つていたところをトレーナーの大久保に助けられる。ブルペンに設置された電話のランプが赤く光り、着信音が鳴り響いた。キャッチャーミットに収まるボールの音が大きく反響する屋内ブルペンでは大音量でないと気がつかない。試合展開が荒れたものだった場合、出番を予想して肩を作る救援投手も居るのだが――フランクリン投手の突然の乱調はパイレーツベンチはもとより、ブルペンにとつても晴天の霹靂だった。

「おい東、仕上げておけ。お前もだ？いつでも行けるようにしておけ？とさ。出番がありそうだぞ」

左のワンポイント東と中根に西山の声がかかる。「よし、いい球だ」ブルペン捕手の大声をさらに上回るとよめきがスタンドから漏れてきた。点差が縮まったのだらう。汗を吹いた東がブルペンを出て行く。

東の登板にファイヤーズ代打の代打を送った。切り札的存在、右のスラッガー首藤がコールされる。

「まずいな……監督がご機嫌斜めだ。次、行くぞ」

「はいはい、お仕事お仕事。」

緊張感とは程遠い口調だったが、中根の投げるボールに力がこもり出す。ブルペンのテレビに映る地方局の中継画面には4 - 3のスコアがクローズアップされていた。

「おいおい、押し出しかよ……」

ため息を漏らす西山を電話が急き立てる。

「いや、ちゃんと仕上げて送り出してますって……ええ、それはもう——」

受話器を離れた耳を指でほじる仕草から、電話の向こうが怒声だったことが伺える。

「頼むぞ、お前までもが押し出しのフォアボールを出してくれた日には、シーズン早々の配置転換が俺を待っているんだ」

西山は悲愴な顔と声で中根を送り出した。

「おい通訳、デンゼルにもアップしとけて伝えてくれ。ハリーアップでな」

雲を突くほどの大柄な黒人投手が立ち上がり、職員が均したばかりのマウンドでウォーミングアップを始めた。

「村山も……お前はいいか……」

「ええ、僕はあちらで2、3球投げれば」

テレビ画面に映るスタジアムのマウンドを指差して村山が答えた。

「なんとか九回までリードを保っていてくれよ、でないと俺が監督から大目玉だ」

大寫しになつた中根に向かって手を合わせる西山の顔には、東北の早春に似つかわしくないほどの汗が噴き出している。

「3アウト！パイレーツ、ファイヤーズの猛攻をなんとか凌ぎ切りました。今のボールは？」

実況アナの問い掛けにパイレーツOBの解説者遠藤が答える。

「アウトコースを狙ったスライダーがインコースから真ん中に入ってきましたね、バッターが力み過ぎてミスショットをしてください。冷や冷やしましたよ。キャッチャーの下條も？やられた

っ！？と思ったんじゃないですか？」

ふう、とテレビを見ていた西山が大きな息を吐く。

「9回は上位打線か……左左と続くからデンゼルが呼ばれるんだろつな。給料分ぐらいの働きは見せてくれよな」

黒人投手のウォーミングアップに目を遣った西山の眉がダラリと下がる。球は速いが球道定まらずの様子でブルペンキャッチャーのミットが上下左右へと忙しく動いていた。

「おい通訳さん、デンゼルにどこか悪いのかって聞いてくれ」

フェンス越しに二言三言話し掛けた通訳が西山の許へ戻ってくる。

「マウンドの傾斜が合わないと言っています」

「勘弁してくれよ、ここの傾斜はグラウンドと同じなんだぜ」

まだ下がる余地があったのか——西山の眉はへの字を通し越してハの字を描く。悪いとは思いつつ村山は失笑を隠せないでいた。

追い続ける相手を突き放したかった8回裏パイレーツの攻撃は、相手のセットアップにクリーンアップが三者凡退に倒れ0点。先攻したパイレーツ、追い上げるファイヤーズ、どちらのチームにも落とせない試合展開となっていた。

西山の予測通り、ファイヤーズの勢いを止めるべく9回表のマウンドに送り込まれたのはデンゼル投手だ。左左と続く上位打線、どちらかを打ち取ってくれば村山で後を凌ごうといった星屋監督の目論見は、先頭打者にストレートのフォアボールを与えた時点で脆くも崩れさる。ノーアウト1塁、続く三番打者は安打製造器の異名をとる原田だ。マウンドの土を蹴り上げ「Shit」とか「Fuck」とかを繰り返すデンゼル投手だが、ベンチの奥、憤懣やる方なしといった表情で腕組みをした星屋監督の心中も同様だったろう。インニングの先頭打者を四球やエラーで出した場合、得点となる確率は非常に高い。星屋はミーティングの際、救援陣に口を酸っぱくして言ったものだ。通訳が付いているのだからデンゼルにも伝わっているはずなのだが……フランクリンの好投が続くものと信じていた

パイレーツベンチは、ポイントゲッターの荒井とウィルソンを守備要員と交代させており、勝ちパターンの継投で使う東と中根も降板させていた。追いつかれたら勝ち目はないな——出来れば使いたくなかったのだが仕方ない——星屋は腹を括った。

「村山だ」

ピッチングコーチの有馬の顔も見ずにそう告げるとウィンドブレーカーを脱いでベンチを飛び出した。

『ピッチャー、デンゼルに変わりまして村山一途、背番号68』

場内放送の後、観客席から大歓声が沸き起こった。たった一度の手品の如き牽制に魅せられた観衆は『一年通して上に居ればセーブ王も』と言った星屋の言葉に大きな期待を賭けていた。打者への打球が一度もない投手への期待としては過剰とも思えるものだったが昨シーズン、プレイオフ進出の夢を打ち碎いたにつくきファイヤーズが相手となれば、その盛り上がりも無理からぬことだったろう。

ホームゲームでは、それぞれの選手がテーマ曲を選んで登場のBGMとしている。村山は伊都淵がよく調子つ外れに歌っていた21 Gunsを選んだ。「君は廃墟に立っている。武器を捨てよう、もう争いを止めよう」という和訳を訊いてこれしかないと思ったのだ。外野席下に設けられたブルペンから電動カートに乗った村山が出てくると歓声は一段と大きくなった。POW、POWのコールはドーム型球場の天井までをも共振させるようだ。観客が掲げた手製のプラカードには『Pick-off - Wizard (牽制の魔術師)』と書かれている。気の早いファンの命名なのだろう。

初対戦の場合、その勝ち方、或いは負け方がシーズン通しての相性となってしまうことが多い。開幕して4戦目とはいえ、既に双方のベンチは総力戦の様相を呈している。ファイヤーズも福島を代走として送り込んできていた。代走のみで盗塁王のタイトルを獲得した？足のスペシャリスト？である。『何がなんでも同点に』といった決意の現れなのだろう。そしてパイレーツベンチからは辻が小走りに出てくる。やはり座布団を二つ折りにしたようなミットを抱え

て。

「いよいよ話題のピッチャーの登場ですね。遠藤さんは村山の初登板はご覧になっておいででしょうか」

「ニュースで観ました、凄かったですね。ただ今回のランナーは一塁。ターンを必要とされる牽制になる訳ですし、ランナーは福島でしょう？ 警戒はしていると思いますよ」

「ワンヒット同点を狙ったの代走起用ですから当然走ってくるんでしょうね」

「福島はピッチャーのクセを盗むのが天才的ですからね。それに今回はノーアウトのランナーです。村山君が打者にどんな球を投げるのか、私はそちらにも非常に興味があります」

実況席でそんな会話が流れる中、スパイクで足元を均す村山にピッチングコーチの有馬が言った。

「ランナーは福島だ、速いカウントで絶対に走ってくる。辻の肩で二塁は刺せん。先ずはあいつを殺してくれ」

殺す——物騒な言葉だがこの世界では単にアウトにするという意味で使われる。

「分かっています。吉岡さん関口さん、宜しくお願いします」

村山は守備固めに入っていた一塁手と三塁手にそう告げた。

「あの……俺は村山さんより年下ですし呼び捨てでいいですから」
恐縮する吉岡はそう言って三塁キャンバスへと駆け戻る。

「頼んだぞ」と言って有馬がベンチに下がると、村山はキャッチボールのような投球練習を始めた。そして3球投げたところで主審にプレイを申し出る。

「まだノーアウトなんですが、村山は状況が分かっているんじゃないか？」

「そうですね……よしんば、また手品みたいな牽制で福島を刺したとしても、その後二人の打者を打ち取らねばいけない訳ですから……あの投球練習から想像するとナックルボーラーなのかも知れませんね」

先のゲームで村山の牽制の瞬間を見落とした黒岩と同じ轍は踏むまい——ウォーミングアップをする村山の手元をじっくり見ていた遠藤は、ボールの握りからその可能性を示唆する。

「ほお、珍しいですね。日本人のナックルボーラーは」

「あれは爪でボールを弾き出すように投げる訳ですからね。爪の強い欧米人には投げられても、そうでない日本人には難しいと思うんです。しかも、ここはドーム球場で風の影響を受けにくい。？フワフワ揺れてナンボ？のナックルボーラーには向いてないように思えるのですが……まあ、見てみましょう。星屋監督の言う？牽制だけの投手ではない？のかどうかを」

村山がセツトポジションに入った。福島がするすると塁を離れるが先のビデオで見ているだけにややナーバスになっているようだ。いつものようにアンツーカーから両足が出るリードではない。

村山は素早いターンから一塁へ牽制球を投げる。ワンウェイリード（帰塁を前提にしたリード）の福島は余裕でセーフになる。しかも、一塁手の関口はボールをこぼしていた。

「ターンは素早いですね、鳥取セネターズの前原並みです。ただ送球が遅い……あれでは福島を刺すことは不可能でしょう」

解説者の声が聞こえたかのように福島がリードを広げた。アンツーカーに片足がかかる。首を捻って走者を見るでもない村山の様子に、牽制のサインはキャッチャーが出しているのか？と視線を振った瞬間、矢のようなボールが飛んできた。

「アウトーッ！」

滑り込む余裕すらなかった。ピッチャーはいつターンしたのだろう？目の端ではその動きを捉えていたはずなのに……福島を混乱が襲う。

「何……が、起きたんでしょう？お分かりですか？遠藤さん」

「いや……ピッチャーから目は離してなかったんですが、よく……プレートを外したまでは見ていたのですが……」

観客席もファイヤーズベンチも、実況席までもが前回と同様の反

応を示していた。一体、何が起きたのだ、と。

「スローが出ます」

実況アナの声に遠藤の目はモニタに釘付けとなる。画面に映る村山はプレートを外した瞬間、バツクハンドで一塁へと牽制球を放っていた。振り向くこともなく――

「何なんだ、一体……どうしたらこんなことが出来るんだ……」

解説者という立場を忘れ、遠藤の呟きは独り言のようになっていた。

「ボークでは……ありませんか？」

アナウンサーの問い掛けに遠藤は我へと返る。

「プレートを外している以上、バッターへの投球でない限り反則投球にはなりません。しかし信じられません、テイクバツクなしで振り向きもせずにあんな牽制が出来るなんて……彼は後ろにも目がついているんでしょうか」

試合後、星屋によって種明かしされる魔法の実態はこうだ。村山は予め三塁手にランナーがリードの頂点まで出たらグラブを立てて知らせてくれと言っていたのだ。それがランナーに目を遣らなかった理由で、プレートを外す足を三塁と一塁を結ぶ直線上に置き、それと並行して手首を振ることによって左右にブレることなく正確な牽制球を投じることが出来たのだった。もとより手首を振るだけで放たれるボールに高低の狂いはなく、集中さえしていればベースの上――胸の高さに富んでくるボールを一塁手が取り落とすこともない。

ファイヤーズ監督新谷が抗議を諦めてベンチに下がると、改めてプレイがかかった。？固唾を呑む？球場内の雰囲気は正しくそれだった。試合が延びたナイトで鳴り物を使った応援に制約があった訳でもないのに、ファイヤーズ応援団の陣取るライトスタンドも静まり返っている。次はどんなイリュージョンが見られるのだろう、そんな興味に覆い包まれているようだった。

胸の前にグローブを置いたノーウィンドアップポジションから村

山の投球動作は始動した。気負いのないフォームから放たれた初球は、真ん中低めに構えた辻のミットに収まった。

「ストライーク！」ややあつて主審の右手が上がる。

「152 km/hです。速いですね」

「ええ、この時期にしては……おかしいな？ ナックルボーラーではないようですね」

首を傾げる遠藤だった。サインの交換をするでもなく村山は二球目を投げ込む。原田のバットがあえなく空を切った。

「ストライーク！ツー」

バッターボックスを外し素振りを一度くれた原田はしきりに首を傾げていた。バッティンググローブのマジックテープを締め直して打席へと戻る。ホームプレートの際を軽くバットで叩くルーチンを終えると構えに入った。プレイの聲がかかり村山は三球目を投じる。

「ストライーク！バッターアウトツ！」

首を傾げてベントへと戻る途中、ネクストバッタースサークルの四番垣内が原田に訊ねる。

「真っ直ぐか？」

「だと思っんですが、どうも……」

「頼りない返事だな。確かに33歳のルーキーにしては速い球を投げるが、プロを舐めてもらっちゃ困る。俺がガツンと洗礼ってヤツを味あわせてやろう」

「真っ直ぐですか？」

実況席でもアナウンサーが同じ問い掛けをしていた。

「いやあ……なんだか伸びたようにも沈んだようにも見えて……」

スピードガンの球速表示から判断すればストレートなんでしょうが

……あれっ？」

「どうしました？」

「いや、この村山君の握りを見てください。これはクソ握り——失礼、驚掴みで投げてませんか？ それであの球速なのか……いや

はや先ほどの牽制といい全く信じられません。何故、今まで注目されずに居たのでしょうか、これほどピッチャーが」

放送席でのそんな会話が交わされる中、垣内は三度振って三度ともバットにかすりもせずの三振で試合は終わっていた。

「なんだ、あのザマは。万年Bクラスのぽつと出のルーキーにいよいよにあしらわれて」

ファイヤーズベンチでは監督の怒号が響きわたる。

「動くんですよ、あの球速で。それも沈んだかと思えば伸びるし、右に滑ったかと思えば食い込んでくる、スピットボールじゃないでしょうか」

ボールに唾や整髪料をつけるなどして投げる不正投球のことだ。

垣内の主張に使用済み試合球が集められたボールを調べようと足を運びかけたが思い直してベンチに戻った。もしそうだとしたら現行犯で赤っ恥をかかせたやった方が効果的だとも考えたのだろう。

グラウンドでは戻ってくる野手を一人一人迎えた村山が辻に肩を叩かれながらベンチへと戻ってゆくところだった。星屋の暑苦しい抱擁に顔を歪めながら、それでも仕事を成し終えた充足感を顔に滲ませていた。

「凄いピッチャーが出てきたものです。村山一途、テスト生入団の33歳、174cm、64kg、右投げ右打ち、背番号68、黄金水産高校から黄金信用金庫……これ以外何も分かっていますませんが、魔法のような二種類の牽制球と150km/hを超える球速。この調子で投げ続けられれば星屋監督の言われた通り、最優秀救援投手もあながち夢ではないのでしょうか。試合を振り返ってもらいましょう。遠藤さん、なんでしょう？あの球種は」

「握りだけ見ればチェンジアップかパームボールのようなのですが、それが150km/h

を超えるなんてことは有り得ないんです。まあ、有り得ないと言えばあの牽制もそうなんですが」

「しかし、チェンジアップならもっと球速は落ちますよね？だ

から沈むのだというのが私の認識なのですが」

「未だかつて誰も150km/hを超えるチェンジアップなんて投げたことはないんです。それがどんな変化をするかなど誰にも分かりはしませんよ。見てください」

ビデオに映る村山のボールはブレながら上下左右に変化をしていた。垣内の打席では投じた三球のうち二球を辻捕手が落球するほどで、重力の支配を逃れたかのようなその動きに、さしもの安打製造器原田でさえ球種を特定することが出来なかったのだ。

「私に言わせれば凄いなんでもんじゃない。とんでもないピッチヤーです。今年のパイレーツは面白くなりそうです」

POW！ POW！ と観客席からはヒーローインタビューに村山を出せとのコールが沸き上がる。しかしベンチから出てきたのは4得点中3打点を記録し、守備固めでラインアップから外れていた元メジャーリーガーのウィルソン内野手だった。

「放送席、放送席——」

お約束のインタビュが始まる中、着替えを済ませた村山は応援団の着るレプリカユニフォームに身を包んで観客に紛れ込み、一般の入退場口を抜けて球場を後にしていた。

復興へのパラダイム（規範）

前期の日程も終わりに近づいた68試合消化時、仙台パイレーツは二位ファイヤーズを4ゲーム離してペナントレースのトップを走っていた。その快進撃の立役者となったのは間違いなく村山一途。彼が積み上げたセーブはその数32、このままのペースで後半戦も投げ切るとすれば年間セーブ記録の更新は間違いのないところだった。そして驚嘆すべきはその投球内容だ。卓越したバットコントロール技術を持つプロの打者相手である。全てを三振で、という訳には行かなかったが、それでも？ムラチェンジ？とファンが名付けた150km/hを超えて動くボールにはバットに当てるのが精一杯。ゴロアウトとハーフライナーを含むフライアウトがそれぞれ4つずつ。セーフティバントを狙ったキャッチャーへのファールフライが1つあるだけだった。当然の如く被安打は0の与四球も0 防御率0.00奪三振77は驚異的を通り越して前代未聞未来永劫達成不可能な数字だったと言えるよう。

POWの愛称はもらっていたが披露する場はなくなってしまった。塁上にランナーが残った場面での救援もあったのだが、村山の牽制を知っているランナーが離塁などするはずがない。いつしか彼はスコアブックに記される三振を意味するK——それをとってプロフェッサーKと呼ばれるようになっていた。

制球に問題のあったデンゼルも日本のストライクゾーンに慣れるに従い調子を上げてきており、7回までパイレーツにリードを保たせてしまった場合、対戦チームがその試合をモノに出来る可能性は限りなく0に近くなっていた。相乗効果で打線の方も上位から下位までムラなく当たりが出てきており、いくなれば盤石といった常勝チームのような安定感を羨む他球団は少なくなかった。

村山が登板する試合でバックネット裏にスピードガンを手にしたメジャーリーグのスカウトがずらりと並んだこともある。気の早い

スポーツ誌は？すわ、メジャー流出か？と報じたものだった。しかし「僕はパイレーツ以外で野球をする気はありません」と広報を通じて村山の意味が明らかにされるに至り、胸を撫で下ろしたのはパイレーツファンばかりでもなかったろう。

村山の悩みは広く顔が知れ渡ってしまったことだ。観戦にきてくれた伊都淵達と食事に行けば彼等の素性とその関係をしつこく聞かれ、定宿にしていたビジネスホテルも嗅ぎつけられた時には出待ちの記者が列をなしてホテルから苦情を言われたこともある。ただ500万円の年俸では家など買えるはずもない。仕方なく球団の寮へと引越せざるを得ない状況となっていた。

東北に新たな希望を持たせたい。ただそれだけの情熱を秘めてのプロ入団だった。しかしそんな彼の意味とは関係なく周囲は度を越して過熱していった。

オールスターゲームにもダントツの得票数で選出が決まった。そんな或る日、東京への遠征を終え新幹線で帰路につく村山の携帯電話がメールの着信を告げた。

『未だに記者に囲まれて困っているのかい？ それは自分のことを何一つ話さない君のせいでもある。ヒーローインタビューにも一度も顔を出さずなんてのは君の成績と同じく前代未聞の出来事だからな。プロフェッサーKの謎は深まるばかりで記者さん達への社からのプレッシャーも相当だろう。そこで提案がある。憶測も希望的観測もナシで記事を書いてくれる人が居る。彼女のインタビューを受けてやってくれないか？』

それは伊都淵から届いたものだった。

「本当に取材陣の数が減りますか？」

「ああ、多分。それとこのインタビューには別の目的もある」

ニヤリと笑う伊都淵だった。五ヶ月ぶりのボランティア宿舎は村山が去った時と何も変わっていない。しつこくついて回る報道陣を巻くために出動した四台の同型RV車で選手寮を同時に出発し、自

動車道の乗り降り回数繰り返した後に宿舎へとたどり着いていた。エンジン音が外で聞こえた。仲間たちが戻ってきたようだ。

「ムラさん、お久しぶり」

最初に入ってきたのは鈴木雄一郎と依子だった。一つ目的に汗を流しあつた者同士が離れていた時間を埋めるのに多くの言葉は要らない。ただ笑顔を交わすだけで空白は消え去る。ほどなくして残りの二台が戻ったようだ。カジに続いて入ってきた女性は球場で何度か見たことのある記者だった。最後に入ってきた本田正が言った。

「俺が最後か……テレビ仙台だっけ？ あそこはしつこい。隣に並びかける度、後部座席のかおりをなんとかカメラに収めようと『窓を開けて下さい』って怒鳴るんだ。代わりに俺が窓を開けて文句を言つてやった。村山さんと彼女の密会だとも思つてたのかな？俺を見た時の顔つたらなかったよ。なあ」

とはいえ、二人の表情は楽しくて仕方がないといった様子だ。

「宮城スポーツの仙道由里さん、別嬪さんだけどこれまたイケメン君の彼氏が居る。変な気は起こさないようにな」

勿論、村山にそんなつもりはない。取材陣に悩まされる機会が減れば助かる——ただただ、それを願つての取材の受諾だった。

「早速ですが、よろしくお願いします」

伊都淵に紹介されて頭を下げる仙道に、村山も会釈で返した。IレコーダーのRECボタンが押され取材が始まった。

地震と津波で妻子を亡くしたこと、その時に大怪我を負ったこと、何故パイレーツに入りたかつたかを或る一点を除いてあまなく語り尽くした。

「これで終わりです、どうもありがとうございました」

仙道の声に、ラップトップパソコンを真剣な表情で覗き込んでいた伊都淵が顔を上げる。彼が金融派生商品の取引でボランティア活動の資金を稼いでいることを村山は知っていた。

「どうですか？ 調子は」

「君の年俸ぐらいは稼いだよ。送ろう、仙道さんも」

伊都淵は壁にかけられたRV車のキーを手取る。後ろ髪を惹かれる思いではあったが、懐かしい仲間達と握手をして村山は宿舎を後にした。

「どうかしてんじゃないのか、この新首相。『福島のリ建なくして日本のリ建なし』だと？ 宮城も岩手も忘れちゃいせんかってんだい」

カーラジオから流れるニュースに伊都淵が顔をしかめる。

「原稿は秘書が書いているんでしょうが、それをそのまま読んでしまふ首相も首相ですね」

信用金庫マンだった頃からデタラメな国の政策には諦観を向けていた村山だった。大震災以来の迷走ぶりを挙げれば枚挙に遑なしといった感さえある。最早、国になんとかしてもらえななどといった妄想は抱かない方がいい、落胆を招くだけだ。伊都淵と仙道の話をもそんな思いで聞いていた。

「そこで君の出番だ」

急に水を向けられ？君？が自分であることに気づくのに少々時間がかかった。

「え……僕ですか？」

「ああ、仙道さんの記事と君の快投が東北を救うんだ。球宴後も頑張ってくれよな。記事が載った途端、急降下では彼女も立つ瀬がなくなってしまう」

「言われるまでもなく頑張るつもりですが……」

どんな記事になるのだろう。村山はミラー越しに自信ありげな表情を浮かべる伊都淵を見つめた。

？プロフェッサーKの真実に迫る？

そんな見出しのついた仙台スポーツの記事には、次のように書かれていた。

『一切のインタビューを拒絶する仙台パイレーツの村山一途投手。』

彼も東北に住む多くの人々同様、あの大地震の被害者だった。

2011年3月11日14時46分 その時間、勤務先である黄金信用金庫に居た彼は地震の第一報を聞くと自宅のあった女川町へと7kmの距離を走って戻った。高台にあった彼の自宅は地震による被害を免れていたのだが、数分後に襲った大津波で流されてきた電車に家屋もろとも押し潰されてしまう。妻の菜穂子さん（29）と長女のひとみちゃん（3）はその時に亡くなられたようで、自宅にたどり着いた村山は変わり果てた妻子を抱きしめたまま悲嘆にくれていて、余震に気を回す余裕はなかったのだらう。数分後に襲った余震と呼ぶにはまりにも激しい揺れが、骨組みの脆くなっていた自宅の軒庇を崩落させ、彼の右腕はその下敷きとなった。あの混乱の中、翌日自衛隊員に発見されるまで、彼は無事だった左腕で家族を抱き寄せ、庇うように覆い被さっていたという。

肘頭骨・橈骨を含む四箇所骨折、橈側手根屈筋腱など三箇所筋断裂で彼の腕は回復不可能なほど破壊され尽くしていた。最初に彼の腕を診た医師の所見は？切断やむ無し？だったそうだ。多くの医療機関が被災し満足な治療など期待出来ない中、自衛隊のヘリで専門医のいた茨城県へと搬送され、なんとか切断は免れることが出来た。そして彼は或る決意を胸に、ツギハギだらけの腕で懸命にリハビリに励んだ。その機能回復を東北の復興と重ね合わすかのよう。それは想像を絶するものだったに違いない。

軟式野球の経験しかなかった彼が目指したものは、驚くことに仙台パイレーツのマウンドだった。一度は諦めた右腕だ、それが取り戻せたのなら世の中に手の届かないものなどない。自身が復興のパラダイム（規範）になってやろうと決意したのである。だが、それを口にすれば笑われるだけ。胸中に掲げた目標に向け、雪の中を雨の中を彼はひたすら走り続けた。思い描いたゴールへの道程は果てしなく遠大で、また、平坦でもなかった。球界に知名度がなくプロテストは年齢制限によって受験資格さえ与えられない。あまたの障害が立ち塞がる中、幾度も胸に去来する諦観を振り払ってあらゆる

途を探り続けた。そして彼は今、かつて誰も成し得なかった成績を引っ下げ、そのマウンドに立っている。

スピットボール疑惑をぶち上げた人物も居た。自身の理解を超えたボールなら反則投球であるといった発想は唯我独尊を地で行くようなものだろう。プロフェッサーKの真実が明らかにされた今、彼には素直に過ちを認め、一刻も早い猛省を期待するものである。

諦めてはいけない。援助のみに縋っていては、願う明日は果てしなく遠い。未来を手繰り寄せるのは一人一人が踏み出す一歩なのだと言うことを、彼は投げ続けることによって我々に伝えようとしているのではないだろうか。

村山投手の契約金は1000万円、年俸も500万円と一軍最低レベルである。片や一度も一軍経験のないドラフト一位の長嶺選手に支払われた契約金は一億円。それでも彼は文句一つ口にせず日夜パイレーツの試合を締め括り続ける。用具メーカーからのスポンサーードもアドバイザリー契約も受けてはいない。今時ネーム刺繍の入ってない古びたグローブを持ってマウンドに上る投手などいない時代に、である。記者が紹介しようとした時、彼はこう答えた。「まだ充分使えます。僕にくれる物があるなら東北の子供達に配ってあげて下さい」

ネピアスタジアムで行われる今年のオールスターゲーム、村山一途投手の生き様に感銘を受けたポインタバンドが試合前に登場、ミニライブを行うと発表があった。より多くのファンがスタジアムに駆けつけ、村山投手に――東北地方へと声援を送ってくれることを切に願うものである。 記事：仙道 〴

弱気になった時のことは書いてないのだな――誌面上の制約でもあったのかな？ 寮のロビーで仙台スポーツを読んだ村山は面映ゆさに一人類を緩ませる。

ポインタバンドか……本当に仲間だったんだ。人気の最盛期に活動を休止、そのギター兼ヴォーカルのNAOが自衛官となってこの東北で復興活動にあたっていたことを写真週刊誌がすっぱ抜いたのは

記憶に新しい。記事を読むより早く『と、いう訳だ』と短いメールが伊都淵から届いていた。彼の言った通り話したままを書いてくれた仙道に感謝したい気持ちになり、その旨を書いたメールを伊都淵に送信して球場行きのマイクロバスに乗り込んだ。オールスターゲーム前、最後の三連戦は博多コンドルズを迎えての地元ゲームだった。

閃光、舞う

伊都淵さんはあんなことを言っただけで減ってないじゃないか……球場入りした村山を待つ報道陣の数は倍増していた。いつものようにマイクやカメラを体にぶつけられながら揉みくちやにされてロツカールームへと向かうことを覚悟したが、少し様子が違うことに気づいた。「頑張つて下さい」「感動しました」「村山さんは東北の星です」そんな声援を投げかけてくる地元の記者達が中央誌の記者のバリケードとなつて立ち塞がってくれていた。戸惑いながらも胸に期するものを覚える。「ただ、ヒーローインタビューぐらいは受けてくださいね」その一言に取り囲む報道陣からどつと笑いが沸き起こる。声の主は仙道由里だった。

コンドルズとの三連戦を2勝1敗で終え、セーブも二つ積み上げた村山が次に挑むのはオールスターゲームのマウンドだ。昨年の日本シリーズの覇者東京ミリオンスからは首位打者とホームラン王の二冠に輝くゴンザレス選手、ルーキーながら今シーズンの首位打者争いをリードする上原選手らが選出されており、直前インタビューでも『ヒットだけ狙えば必ず打てます』と、リップサービスたっぷりの仙台入りだったという。

「お前さんのお陰で、俺はすっかり悪役扱いだ。負けてても9回は行くからな」

オールアトラランティック監督の新谷の声がかかる。

「申し訳ありません。私が言つた訳では……」

「分かつてるよ、そんなことは。とにかく今日はお前が出てきても試合が終わつたという気にはさせられないで済む。最終回到監督が胃を痛めないで済むつてことがどんなに楽だか分かるか？ 星屋さんが太つたのはお前のせいだな」

そんな冗談を混じえ腹に含むものがないこと新谷は伝えてきた。

「私は与えられた仕事をこなすだけです」

「いつそ、お前に3イニングぐらい投げさせて後半戦にへばつてもらいたいもんだが、それをやるとまた新聞に何を書かれるやら……」

豪放に笑って新谷が村山の背中を叩いた。

お祭り気分の球宴では、他チームの投手同士、情報交換をするものらしい。島根セネターズの若きエース前原が隣に下ろす。

「前原です。なんとか村山さんの出番までリードを保てるように頑張ります」

「宜しくお願いします」と言つて、胸ポケットを探ろうとしたが銀行員時代の背広姿ではなく、名刺も持っていないことに気づき、村山は一人苦笑する。

「嫌だなあ、僕の方が年下なんだから、もっと砕けた感じでお願いします」

「しかし、前原君……は去年の沢村賞受賞投手で、プロでの実勢も私より遥かに——」

年齢による上下関係が厳然としたプロ野球界だった。ただそれに未だ慣れることのない村山は26歳の前原を？君？と呼ぶのにも遠慮がある。

「だったら、昨年怪我で登板機会のなかった俺はどうなる？」
東京バーバリアンスのベテラン池田投手が前原の反対側に座って言った。

「いえ、池田さんは僕が銀行員だった頃から既にバリバリ活躍していらして——」

「だろう？ 俺が言いたいのは、だ。そうじゃちほこばるなつてことさ。今のお前は間違はなく球界一のストッパーなんだから」

恐縮する村山の肩をポンポンと叩いて池田はブルペンへと去って行った。

「あの牽制、教えてもらえませんか？」

「いい……よ」

人懐っこそうな笑みを浮かべる前原投手を伴って、村山もブルペ

ンへと向かう。ポタバンドの演奏が始まる前に戻れるかな？ そんなことを考えながら。種々のセレモニーが終わったグラウンドではホームラン競争が始まるうとしていた。

「無理だ——手首がどうにかなっちゃうよ、これ」

元より特殊な腕を持つ村山なればこそその牽制である。キレのあるストレートイコールスピンのよくかかったボールというのが常識のプロ野球界に於いて、そのストレートが持ち味の前原だ。元祖に教えを乞うても容易に真似られるようなものではない。

「村山さんは一体どんなリストをしてるんですか？」

村山が真夏でも長袖のアンダーシャツを着ているのは、記事にあった通り縫い目だらけの腕を隠したかったからだ。それでも何故かこの時はすんなりとシャツをめくって見せた。

「うわあ、新聞にあつた通りだ。痛くはなくては……ないですよね？」

「怪我をしてから病院で目覚めるまでは殆ど気を失っていたらしい。だからあまり覚えていない……かな。数本の腱だけで繋がっていた腕はくつついてるのが不思議なほどだったと医師に言われたよ」
その状況を想像したのだろう、前原は腕から目を逸らすと大きく顔をしかめた。

「でも、骨折すると却ってその部分は強くなるっていいませんか？ ほら、キャッスルズのキャッチャーの谷さん、あの人も小さい頃に鉄棒から落ちて手首を折ってるそうです。だから、あんな歳になっても盗塁を刺せるのはそのお陰だって言っていましたよ」

若い頃から強肩で鳴らした38歳の谷捕手が未だ衰えを見せないスローイングの持ち主であることは村山も知っていた。ただ……自分分はそれとは違ふのだ。「そうなんですか」と積極的に話しながらない様子の村山を見て、前原は災禍を思い出させてしまったのではないのかと話をまとめにかかる。

「じゃあお前も骨折してみるか、なんて言われたらゴメンです。」

僕は僕の持っているものを磨くようにします。ありがとうございました」

気のいい青年なのだろう。プロとして7年も後輩にあたる村山に深々と頭を下げ、ブルペンを出ていった。

「それでは、最後にこの曲を村山投手と東北地方の皆さんにお贈りしたいと思います」

ポントバンドのヴォーカルNAOがミニライブの最後を選んでのはエリック・クラプトンのチェンジ・ザ・ワールドだった。歌い終えた彼がマイクを手に満員のスタンドに向けて言った。

「我々が目に見えるのは地震や津波の爪痕だけです。皆さんの心の中の闘いがどれほどのものであるかは想像することしか出来ません。頑張れ、負けるなという言葉が如何に無責任なものであるか、僕は三カ月の災害派遣で思い知らされました」

先ほどまでの黄色い声援は鳴り止んで球場内が静寂に包まれる。全ての人がセカンドベース近辺に立つNAOの声に耳を傾けているようだ。

「大切な人を失った哀しみが皆さんの心から去ることはないでしょう。僕も父とも呼べる恩人を亡くしました」

バックスクリーン横の大型ビジョンに大々写しになったNAOの頬には幾筋もの涙が流れ出ている。

「それでも前に進むのを止めてはいけません。諦めないことがどんなに尊く、どれほど力強いものであるかを村山投手は行動をもつて示してくれています。我々は一つのチームです。普段、敵味方に別れて戦っておられるそれぞれのリーグのみなさんが、今日は勝利という一つの目標に向かって力を結集されます。チーム日本もそれに倣いましょう。がんばっペー！東北」

大きな拍手が起こる中、方々ですすり泣きが混じる。たくさんの報道陣を引き連れて避難所を回っていた芸能人には反発も感じた村山だったが、この時だけはベンチで目頭を熱くしていた。

NAOの言葉が選手を奮い立たせたのか、オールスターゲームらしからぬ真剣勝負が繰り広げられた。スパイダーマンの異名をとるセネターズの兩宮外野手がフェンスをよじ登ってホームランを阻止すれば、ファイヤーズの足のスペシャリスト福島も果敢なヘッドスライディングで塁を奪う。ペナントレースさながらの白熱した展開に観客も息を呑んで試合を見つめていた。

「負けてても行く」その言葉通り、1-3とオールアトランティックリーグが2点ビハインドの9回表、ブルペンで入念なストレッチをしていた村山に声がかかった。他球団のセットアップ、クロザーに拍手で送られてリリーフカーに乗り込む。これもオールスターゲームならではだろう。すっかりお馴染みとなった村山のテーマ曲21Gunsが場内に流れると拍手を歓声が沸き起こり、そしてグラウンドに村山の姿が見えた途端、そのボルテージは最高潮となった。スタンドのあちこちで？プロフェッサーK？のプラカードが躍動する。舞台は整っていた。

迎え撃つオールシャノンリーグは2番からの好打順。三年連続首位打者、名古屋ドルフィンズの安打製造器こと野上、そして「ヒット狙いなら必ず打てる」と豪語した東京ミリオンの上原、ゴンザレスへと続く打線は、日本シリーズを見据えた格好の試金石ともいえる。

交流戦が廃止されたこのシーズン、リーグに違う選手の対戦はオーブン戦以外にはない。開幕直前まで登録を引き伸ばされた村山の生きたボールを見るのは、オーシャonzリーグの打者全員にとって初めてのことだった。

「何がヒット狙いなら打てるだよ、人気先行のオーシャonzリーグが——3アウト全部、三振で取ってやろうぜ」

村山の投げるボールを受けることが出来る捕手はこの辻をにおいて他に居らず、仕方なく監督推薦で選出される形での出場だったが、これが初選出となるダンプの鼻息は荒い。例によって3球だけキャッチボール程度のウォーミングアップを行うと主審に右手を上げプ

レイを申し出た。

初球、154km/hのムラチエンジンが真ん中に決まる。安打製造器の野上といえど、初めて見る球筋のそれにバットを振ることも忘れて見逃した。二球目、同じくど真ん中めがけて村山が投げた151km/hのボールはインコース低めへの軌跡を描いたと思った途端、真横に滑ってアウトローへと流れる。空を切ったバットをじっと見つめる野上に辻がマスク越しに言った。

「見たことねえだろ、こんな球。どうだ？ ヒット狙いなら当てられそうか？」

「それを言ったのは僕ではありません」

生真面目な返事を返す野上だったが、彼の闘志に火が着いたのは間違いなさそうだ。

三球目、やはりど真ん中目指して投げるムラチエンジンは打者との中間付近で大きく揺れて野上のバットをかすめキャッチャーミットへと収まった。スコアボードの球速表示は156km/hを表示していた。

「ストライク、バッターアウトー！」

球審のコールにも呆然と立ち尽くす野上がボソリと呟いた。

「有り得ない……ボールが膨らんだ」

「揺れてるからな。でも初対戦でかするなんて、やっぱ大したもんだよオーシャンリーグの安打製造器は」

呆然とした表情でバッターボックスを引き上げる野上にネクストバッターズサークルに居た上原が声をかける。

「どんなでした？ そこそそ速いみたいだけどチェンジアップ系だから縦の変化ですよね？」

「すべる、軌道を変える、膨らむ……」

「はあ？」

「打席に立ってみりゃわかるよ。ヒット狙いなら打てるって？」

あれが打てるなら今年の首位打者はお前に決まりだな。あいつがアトランティックリーグでよかったよ。あんなのとしょっちゅう対戦

してたらバッティングそのものまで狂わされちまう」

そう言ってベンチに戻ってゆく野上の背中を眺め、上原は思った。早々に白旗を上げておいて俺を油断させようって魂胆か？ その手には乗るもんか。体はないピッチャーだ、引きつけて右狙い。ミートさえすれば内野の頭は越すさ。

だが、その思惑は村山の投じた三球で粉碎される。引きつけて打つつもりでは所謂着払いとなり、変化を予測して振り出すバットとは30cmも離れてボールが通過する。せめて球道を見極めてやろうと待球に出た三球目、地を這うような軌道のボールはホームプレート直前で浮き上がって上原をあざ笑うかのようにど真ん中に収まった。村山の手を離れた瞬間から運動エネルギーを失いながらキャッチャーミットへと届くそのボールが再び浮き上がるなどということとは物理学上、有り得る話ではない。しかし強烈なバックスピンのかかったボールは時として打者の予測した軌跡を裏切ることがある。これが？ 伸び？ というヤツだ。スコアボードに163km/hが表示されると観客席からは大きなどよめきが起こった。

辻がマウンドに駆け寄る。長打力のあるゴンザレスを迎え注意を促しに行ったようにも見えたが、マスクを取った顔に浮かぶのは危惧の表情だった。

「すげえ伸びだったな、日本新記録だぞ163km/hは。でも大丈夫か？ 指に掛けちゃいけなかったんだろ？」

「付け根から滑って第二関節辺りにひっかかったようです。五本揃えていたから指には異常ありません。心配をおかけしてすみません」

「ほお、つまり球種が増えたってことか——ますます手がつけられんようになってゆくなお前は。ただ後半戦もあるんだ、怪我だけは勘弁してくれよな。ようやく俺にサインを出せる機会が訪れたって訳だ。相変わらずボールはなしでいいのか？」

「はい、今のがストレート。それ以外はチェンジアップのサインでお願いします」

「メジャーリーガーかよ……まあいい、お前が居る限り俺はクビの心配をしなくて済むんだからな。東北の星は俺の星でもあるって訳だ——おっと、ウェブの紐が切れてやがる」

アンパイヤに走り寄りミットの修理のためのタイムを要請した辻がベンチ裏へと姿を消して行く。

人間である以上、後押ししてくれる声援や自身の精神状態がパフォーマンスに大きな影響を与えることは否めない。冷静に——そうは思うのだが、この投げ方で何km/hが出せるのだろうか？ 第一関節では？ 指を四本揃えたらどうなる？ 疑問への挑戦は耐え難い誘惑のように村山を責め立てた。

オーシャンリーグの4番打者ゴンザレス選手への第一球、チェンジアップのサインに首を振ると渾身のストレートを投げ込む。

「ストライーク！」

明らかに高めに外れるボールをゴンザレスは強振して尻餅をつく。球速は164km/hが表示されていた。

一つの球種を会得するにはプロの投手でも相当な練習量が必要とするものだ。そのためにフォームを崩し他の球種にまで悪影響を及ぼすことも少なくない。それを試合中にこなしてしまう村山が相手では、強者揃いのオールオーシャンリーグといえど為す術はない。尻尾を丸めて退散する訳にも行かず、苦し紛れに振り出すゴンザレスのバットはあえなく二球目も空を切る。167km/h、このピッチャーはどこまで進化してゆくのだろう。観客もベンチも声を上げるのを忘れ、固唾を吞んでマウンドを見守る。数万を超える目は村山の一挙一投足に釘付けにされていた。

まだいける——村山は自身の可能性をとことん追い求めてみたい衝動に駆られる。最後は四本の指を縫い目にかけてみよう。今度こそチェンジアップ、辻のそのサインに首を振り、プロテストの時以来誰にも見せたことのないウィンドアップの投球動作に入った。

171km/h

見逃せば間違いなくボールだった。外角高めに大きく外れたそれ

を、ゴンザレスも球威に負けじとばかりに渾身のスイングで迎え撃とうとしたのだがかすりもしない。辻がミットの土手に当て大きくはじかれたボールは数メートル後方へと転がった。慌てて拾いに行きファーストへと送球し三つ目のアウトが宣告される。振り逃げが成立する場面ではあったがバッターボックスのゴンザレスは「Jesus, Crazy-Rocket」と呟くばかりで走り出そうとしなかった。

9回裏、アトランティックリーグの攻撃を残してはいたが、プレス席の記者達が一斉に忙しく動き始める。スポーツ誌一面の記事は決まった、大見出しに続く記事を頭の中でタイプしながらカメラマン席と社への連絡を取る。試合展開がどうなるかと奇跡の瞬間を目に焼き付けた彼等のターゲットは、とぼとぼとベンチに向かう村山以外にはなかった。

バックスクリーン横の大型ビジョンでスロー再生された最後の一球は真ん中低めへの軌道を描きながら鎌首を持ち上げた毒蛇のように大きく伸び上がる。

「171km/hか……閃光だなまるで——瞬きする間にミットに収まっているようなのをどうやって打てと言っんだ」

ボソリと声を洩らす三塁側ベンチの野上、それは全ての打者の気持ちいを代弁するかのようだった。

スタジアムは異様なムードに包まれたまま、アトランティックリーグの9回裏の攻撃に移って行く。それはオーシャンリーグを代表するストッパー藤城投手がマウンドに上がっても変わることはなかった。今しがた目にしたばかりの奇跡にスタジアム全体が魅了され、三塁側からレフト側スタンドにかけて陣取ったオーシャンリーグ各球団の応援団でさえ鳴くのを忘れたカナリアのように静まりかえっている。バックネット裏で起こった小さな拍手が伝播し、大歓声へと変化するのには数分を要した。

生来の負けん気を發揮してアトランティックリーグ最終回の攻撃を三者凡退に切つてとつた藤代投手に対してもパラパラとした拍手が

起こるだけ。観衆は試合の行方に対する興味を完全に失っていたようだ。少なくとも優秀選手賞はもらうだろう、今日こそは村山のインタビュ―が――肉声が聞けると期待し、彼の再登場を今や遅しと待ち構えていた。

その期待通り、大型ビジョンには優秀選手として表彰される村山の名前が上がったが、この日も観客に彼の肉声が届くことはなかった。

「村山投手は指の怪我のため、病院に向かいました。表彰は辻捕手が代わって――」

そう場内アナウンスが流れると、期待感は大きなため息へと変わってスタンドにこたえました。

テレビでそれを観戦していた伊都淵がポツリと呟いた。

「錯覚が人をあれほどまでに輝かすものなのか――」

閃光の代償

171 km/h それは代価として村山の指先の皮膚を奪いとっていた。アーム式ピッチングマシンのように指の付け根を使ってボールを弾き出す投法だった村山の指先は、他のプロ投手のそれとは違い、マメひとつない頭脳労働者のような柔らかさだった。そこにキツく締め上げられた縫い目が引っかけたスーパースローカメラでさえ数えられないほどのスピンのかけたのだ。当然といえば当然といえよう。球団職員からの知らせを受けて病院に駆けつけた星屋監督は苦虫を噛み潰したような顔となっていた。

「人差し指、中指が三針、薬指が二針の裂傷か……勝手なことをしやがって。辻に手綱を任せておいたのに――」

「でも、オールスターがあれだけ盛り上がったのは村山のパフォーマンスであってこそです。しかし171 km/hか……夢を見てるみたいですね」

星屋の懸念がどこに向いているかも気づかないような発言をする西山バッテリーコーチに雷が落ちた。

「あんなお祭り騒ぎでいくら活躍しようと、ペナントレースは待つてはくれないんだ！顔を見る気にもならんっ！村山によく言っておけ、最短の抹消期間で戻って来いとな」

西山は首をすくめ、殴られでもするかのようにきつく目を閉じた。身を翻し病院のエントランスを抜ける星屋の背中が見えなくなると、治療を終え、灯りの落ちた待合室でポツンと佇む村山の許へと足を向けた。

「申し訳ありません」

「なんだ聞こえていたのか？監督はああいったが前半戦出ずつ張りだったお前だ、いい休養だと思っておけばいい。ペナントレースはまだ半分残ってるんだからな。タクシーを待たせてある。寮まで送ってやろっ」

「お願いします」

伊都淵の台詞ではないが？壁に耳あり——？だ、東北の星を乗せてテンションの上がるタクシー運転手の前で迂闊な話は出来ない。西山は再びタクシーに待っているよう告げると、寮のロビーで村山と向き合う。

「で、医者は何と？」

「骨には異常なく、裂傷のみで全治7日から10日といったところだそうです。チェンジアップだけなら投げられます。登録抹消は待ってもらえませんか？」

「あんな、プロのピッチャーってのは投げる指には絆創膏を貼るのも許されないんだぞ。出血があればそれが止まるまでは投げられない。知ってるだろ？ そんなくらい」

「ええ。ですから無色透明の水絆創膏で指先を固めて——」

食い下がる村山の前で大きく手を振って西山が言う。

「シーズンはまだ半分残ってるんだ、焦るこたあない。恥ずかしい話だが俺はあの171km/hを見てお前のファンになっちまった。きっちり治してこい。そしていつかまたあの彗星のようなボールを見せてくれ。今、無理をさせてお前を潰してしまえば俺は後悔してもし切れない。それに日本のプロ野球ファンから袋叩きに合うのもゴメンだ」

星屋のような野心家ではない。ただ野球が好きで好きで堪らないからバッテリーコーチといった曖昧なポストに甘んじてでも球界に身を置いていたい。そんな西山だった。彼の言葉は村山を納得させるのに十分な重さをもって届いた。

「分かりました。体を鈍らせないよう毎日走ることは欠かさないようにします。傷が塞がり治り次第、報告します」

「おう、楽しみにしてるぞ。監督の方針で、怪我の内容や登録抹消の理由は公開しないことになっている。あのかわい子ちゃんの記者にも話すなよ」

「分かりました」

大きく頷いた西山がじゃあ、と告げて寮を出て行くと、会談を遠巻きに眺めていたファームの選手達がそろそろと村山を取り囲むように集まって来た。

「凄かったです、明日から一緒に走らせてもらってもいいですか？」

「村山さんみたいにはなれないけど、俺も頑張つて一軍に上がつて仙台の野球好きの力になりたいと思いました。色々、教えて下さい」

「僕もです、傍で村山さんを見て吸収出来るものがあれば何でも吸収したいです」

球団経営はビジネスである。支配下選手の枠もあり、3、4年やつて芽の出ない選手は新たな戦力補強のため、簡単に見限られる。村山を囲んだ若者達は、まだ高校や大学を出たばかりの若者が殆どだった。自分が彼等にとつての希望でもあるということを知らされた。

「訊かれれば何でも答えよう、一緒に走ることに何の問題はない。ただ教えるような能力は僕にはない。歳は若くても君達の中には僕よりプロ経験の長い人だって居る。それでもよければ少し話をしよう。こんなところでとぐろを巻いていると他の人の迷惑になる。

ミーティングルームを使わせてもらおう」

連係プレーの基礎やトレーニングのための座学を学ぶ、選手寮における教室のような部屋がある。黒板とテーブル、パイプ椅子だけが並べられた殺風景な部屋に彼等を伴つて村山は入った。暫くは動かさないようにと裂傷を折つた三本の指はまとめて包帯で巻かれている。一つの椅子を引いて背もたれを抱え込むように座つた。

「新聞には書いてなかったことがある。僕の腕がちぎれそうになっていたことは本当だ。そんな状態の腕が再び動くようになるものか、実は半信半疑だったんだ。少し曲げようとするだけで脳天を突き抜けるような痛みがあった。そんな状態でいくらなんでもパイレーツに入ろつなんて思わないだろう？ あれは記者さんの演出もあったんだ」

神妙な面持ちで村山の話に聞き入る若者達の目は真剣そのものだ

った。

「腕の繋がった僕についてくれたのは、ボランティアで井ノ口市というところから派遣されていた看護師さんだった。痛みに耐えかねて、もう放っておいて下さいと言った僕に看護師さんはこう言われた。あなたをここへ運んだ自衛隊の人たち、あなたのその腕を繋いだ先生の努力を無駄にするのか、甘えるんじゃない。とね」

脳裏に蘇ったその光景を見つめるかのような眼差しで村山は続けた。

「そして私の仕事はあなたの腕に機能を取り戻させること、あなたのためにやってるんじゃない。自分自身に後悔を残したくないからこうしているんだ。だから逃げようたつて逃がしてあげない。きれいな看護師さんだったけど、その時ばかりは鬼に見えたよ」

若者達の間にかすかな笑いが起こった。

「リハビリは死ぬほど辛かったけど、多くの人の支えがあつて取り戻すことのできた腕を無駄にしてはいけない。この腕で何が出来たのかを僕は考えた。銀行業務に戻ろうにも社屋は地震で半壊、書類関係は全て水浸しで業務再開の目処すら立たない。悩んだよ。名前も分からない自衛隊員の人や腕を繋げてくれた先生、弱音を吐く僕をしっかりとってくれた看護師さんに、どうすれば元気になった僕を伝えられるのだろう、とね。そして僕は今ここにいます。君達だつてそうじゃないか？ ご両親や友人、チームの仲間が居てくれたからこそプロへの道も開けたんだと思う。僕が幾ら頑張ったって野球を知らない人には何も伝わらないかも知れない。だけど支えてくれた人達の努力には応える義務がある」

プロ入り三年目の吉田という青年がボソリと言った。パンチ力はあるものの確実性に欠ける打撃のせいで未だ一軍未昇格の立派なガタイの内野手だった。

「うちのオヤジは、俺のバッティングセンター通いのためにタバコと酒を止めたつておふくろが言つてた」

「それで君はお父さんの努力に報いられていると思うかい？」

吉田は大きく首を横に振った。

「全然、足りてないと思います。才能の差は埋められないものだと諦めていたところがありました」

「テスト生入団の僕と違って、君達はパイレーツに請われて入ってきている。球団からも期待されているってことじゃないか？ 僕の体格を見るよ、そこいらの一般人と変わらない。記事にあった通り硬式野球の経験もないんだ。才能という点では君達より遥かに劣っている」

村山の言葉に数名が目を伏せた。吉田と同じ思いを感じたのだらう。

「僕自身、君達と同じくらいの年齢の時には、上手く行かないことがあると自分以外に理由を探したものだよ。それを――21歳だったかな？ その若さで気づいた吉田君は凄い」

吉田が照れくさそうに頭を掻いた。

「常に自分が納得出来ているか、それを考えて練習しろってことですか？」

大卒ルーキーの胡桃沢が訊ねる。同意を求めるという行為が些か心許ない。

「どうしろなんて偉そうなことは言えない。僕は僕自身の話をしていただけなんだから」

「何でも教えてもらおうとすることが既に間違っているのだと分かりました。自分の特徴である足と肩をアピールしながら、課題の打撃を向上させる練習方法を探し出します」

社会人チームから入って二年目の青山が立ち上がって言った。

「俺も」「それぞれ個性が違うんだから練習方法は人に教わるものじゃないってことか」と口々に決意を述べる。

鐘を振り鳴らし就寝を告げる寮長の声が廊下に響いた。

「明日もファームの試合があるんだろう？ よく寝るのも練習のうちだよ」

村山が？お開き？を告げる。ミーティングルームを出てゆく若者

達の目には熱く滾るものが見てとれた。

快進撃、再び

言うまでもなく野球は団体競技である。である以上、村山の離脱が即チームの低迷にと繋がるはずもないのだが「パイレーツは8回守るだけ」と他チームに言わしめた絶対的守護神を失ったチームに、その余波はジワジワと現れてきた。配置転換を余義なくされたセツトアッパーのデンゼル投手は最終インングを締め括るには神経質過ぎるノミの心臓を露呈し、シーズン当初の制球難がぶり返したような乱調ぶり。「フィニング投げできれば仕事は終わり」といった先発陣も「より長い回を」とペース配分に腐心するあまり、序盤に捕まっつて大量失点というケースが増えていた。ならば得点力でカバーしようとする奮起した攻撃陣も焦りが顕著になり、エース大隈投手が意地を見せて完封シャットアウトした以外、オールスター明け2勝9敗という体たらく、たった半月でパイレーツのチーム状況は？ドン底？まで急降下していた。気がつけば二位札幌ファイヤーズとのゲーム差は0・5 正に？尻に火が点いた？といっても過言ではない。

京都にフランチャイズを置いていたパイレーツの前身球団の優勝はすでに22年前。それを知る現役選手は一人も残っていない。たった半月前、ダイヤモンドを澆漑と駆け抜けていた選手たちがその輝きを失ってしまうにはいかにも短い期間だった。一年を通じて優勝争いに身を置いたことのない選手達にとってプレッシャーは予想以上に大きいのしかかっていた。前半戦の快進撃から誰がこの惨状を予想し得ただろう。星屋監督が眉間に刻む皺は数と深さを増していた。

狂い始めた歯車は村山の戦列復帰なつた後もすぐには戻らない。札幌に遠征したファイヤーズとの首位攻防三連戦、一・二戦は大差で落とし、エース大隈のスクランブル登板でファイヤーズ打線を0に抑えた第三戦も1点が取れない。疲れの見え始めた大隈のリリーフで、初めてセーブのつかない場面で村山はマウンドに上がった。

ムラチェンジのみで三人を抑えたが、迎えた10回裏、デンゼル投手が打ち込まれて0-1のサヨナラ負けを喫する。この三連敗でパイレーツは首位ファイヤーズと2.5ゲーム差の二位に転落した。千歳ドームのベンチに置かれた冷蔵庫は、星屋の怒りの足跡でボコボコになっていた。

チームの重苦しい空気を一掃するのはエースの力投、四番の一発、若しくは若手の台頭と相場が決まっている。だが、50試合を残して大隈に無理をさせることは出来ず、二年目の田上に「完封してこい」というのも酷な注文だ。ここ10試合の打率が一割に満たない四番荒井は七番へと降格している。星屋は二軍監督から強く推挙のあった青山を昇格させることにした。村山には及ぶべくもないがその強肩には定評があり、一軍に帯同したオープン戦では三つの捕殺を記録し、またチーム一のタイムを誇るベースランニングにも大きな期待が寄せられた。そう、寮のミーティングルームで打撃向上を目標に掲げたあの選手である。地元ネピアスタジアムに三位の東京バーバリアンズを迎えての三連戦、ここで負け越すようなことがあれば二位の座も危うくなってくる。星屋は藁にも縋る思いで青山を7番センターで先発メンバーに起用した。

見せ場はいきなり2回表に訪れた。2アウト二塁からのセンター前ヒットでスタートを切っていたバーバリアンズ一の俊足栗木をレザービームでホーム1m手前でアウトにすると、その裏なかなかモノに出来なかったスウィッチヒッターの左打席に立った青山は絶妙のプッシュバントで出塁した。クイックモーションが苦手な相手投手から盗塁で易々と二塁を奪うと、一番曾我のライト前ヒットで先制のホームを踏んだ。ファームのゲームで真っ黒に日焼けした顔から白い歯が覗く。ベンチでの手荒い祝福が彼を取り囲んだ。

青山と同期入団の田上も意地を見せる。2回のピンチを切り抜けてからは持ち味のスライダーのコントロールが安定し、バーバリアンズ打線から三振の山を築く。そうなればパイレーツ打線にも余裕が生まれ、5試合ぶりに四番に戻った荒井のツーランホームランで

3-0とリードを広げた。完封ペースだった田上を万全を期して8回で下ろし、9回のマウンドには村山が上る。171km/hのストリートは封印していてもムラチェンジは健在。あっさりと三者三振でゲームを締めくくる。パイレーツの勝ちパターンが戻ってきた。センターから青山が全力疾走で村山の許へと駆け寄る。二安打一四球一得点の活躍は一軍デビュー戦としては上々のスタートと言えるだろう。

「村山さんのお陰でチームの力になることが出来ました」

瞳を潤ませて語る青山に、村山も胸にこみ上げるものを感じていた。

「僕は何もしてない。君の努力が実を結んだんだ」

ガッチリと握手を交わし、久々の勝利に酔うベンチへと肩を並べて帰って行った

状態がいい時はやることなすこと上手く行くものである。故障したウィルソンの代役にと一軍に引き上げた吉田が初打席初ホームラン、それも苦手の変化球への対応を見せてのことだった。それを期にチームは若返りを図る。名球会メンバーでチーム一の高給取りではあったが、足も肩も衰えていたレフトのベテラン堂島を代打要因として控えに回すことに決めた。実勢のない若手選手達は、一軍に生き残ろうと必死にプレイを続ける。そこに優勝争いのプレッシャーなど入り込む余地はなく、ポジションを奪われまいとする中堅選手にもいい意味での刺激を与えた。チームの新陳代謝は一気に進み、万年Bクラスだったパイレーツの快進撃はここに再び始まった。

村山は年間セーブ記録の46を残り20試合を残してあっさりと抜きさり、このまま行けばメジャーリーグの記録である62も塗り替えてしまうのではないかと思われた。しかもそれを達成した2008年のK・ROD「フランシスコ・ロドリゲス投手の在籍したエンゼルス」の年間試合数はパイレーツの年間試合数より27も多い162試合。「パイレーツ以外で野球をすることはない」と明言した

にも関わらず、村山を視察にくるメジャーリーグのスカウトの数は増加の一途をたどった。

単年契約、年俸500万円の村山なら移籍金も抑えられる。100万ドルも出せば目の色を変えて飛びつくだろうとタンバリングまがいの接触を試みる代理人も居た。ただ、プロ野球への挑戦理由が支援者への感謝の表明と地元復興の旗印だった村山にとっては、その提示額も何ら興味を惹くものではなかった。

閃光の真実

村山が54個めのセーブを上げた試合でパイレーツのペナントリース優勝が決まった。シーズンも残すところ7試合。残り試合を考えてもメジャー記録の更新は絶望的となったが、50セーブ到達時試合数88、奪三振率22.2、被安打0、与四球0、通算防御率0.00は、この先、誰も達成し得ることが出来ない記録だと多くの解説者が口を揃えて言った。

特筆すべき成績を残した先発投手に送られる？沢村賞？こそ受賞は出来なかったが、ルーキーのシーズンそして日本シリーズのMVPダブル受賞もリーグはじまって以来の快挙だった。

オールスターゲームだったため公式記録とは認められなかった171km/hはメジャー最速記録A・チャップマンの169km/hを上回っている。記録には残らずとも、奇跡の瞬間を共有した全ての人々の記憶に鮮烈に焼き付いていた。

パイレーツはシーズン後半時の勢いそのままに日本シリーズでも東京ミリオンスを四立てで打ち破る。プロフェッサーKは、東北の至宝へとその愛称を昇華させていた。

秋季練習を前に特別休暇が与えられた村山は、懐かしい顔を求め私設ボランティア集団の宿舎へと足を運んだ。

秋の気配漂う海沿いのひなびた小さな街——ここが僕のスタート地点だったんだ——村山は深い感慨をもって二階建ての宿舎を見上げる。ヒビの入っていたガラスも歪んだ窓枠も全て新しくなっており、潮を被って変色していた壁はマリンブルーに塗り直されている。カジの号令のもと、仲間達が作業に勤しむ光景が目に見えかぶ。村山は胸中を過ぎる様々な想いを凝縮させた言葉を見つけた。それと共に玄関のドアを開ける。

「ただいま」

村山を最初に目にとめたのは本田正だった。内部にも模様替えが

施されたのかロビーの中央右寄りに大きな柱が建てられており、また他の柱もふた周りほど太くなって部屋全体が狭く感じられた。極めつけはロビーの半分を占拠する２台トラックの荷台ほどの金属の桶、水槽なのだろうか？ 沢山のチューブが繋がられたそれは小さく鈍い唸り音を立てていた。

「あつ！東北の至宝のお帰りだ。皆のものの頭が高い。控えおろう」大仰に床にひれ伏す真似をする正に「止めてくれよ」と返す村山を、三人の男達が出迎える。夕食前の一時、宿舍のロビーには懐かしい顔が揃っていた。その賑わいに気づいたかおりと依子も調理室から出てきた。

「あつ、村山さんだあ。お帰りなさい」

「？お帰り？今、そう言つて自分を迎えてくれる場所はここを置いて他にはないのだな——再会の喜びと一抹の寂しさが交互に村山に訪れる。

それぞれと固い握手を交わし、無沙汰を詫びる言葉を短く告げる。

「雄一郎君は？」

その問い掛けにはカジが答えた。

「ジムのイベントに駆り出されている。明日には戻るはずだ」

「これが１００万ドルの腕か、何か御利益があるかも知れないな」

軽口を叩く伊都淵の手を握った時、彼が眉根を寄せたように村山には見えた。だがそれもほんの一瞬で、腕に向けた視線を戻した伊都淵の顔には破顔一笑が張り付いている。気のせいか……一年間野球を続けたことなんてなかったから自覚はなくとも疲れが溜まっているのだらう——自身にそう言い聞かせると「どうぞこちらへ」と正がおどけた調子で引いた椅子に腰掛ける。

「いつけない、焦げちゃう」依子が調理室へ駆け戻って行く。カレーの煮える香りがロビーまで漂ってきた。

「代わり映えのしない夕飯ではあるけど村山君の祝勝会を兼ねるとしよう。かおりちゃん、ビールはあったかな？」

村山の正面に座り直した伊都淵が言った。

「ええ、勿論。切らすと正が不機嫌になるんですもの。歩いて行ける距離にコンビニがあるのに、このモノグサ太郎ったら――」

少し顎を上げ、横目で睨むかおりに正はこう切り返す。

「俺は太郎じゃなくって正だってば」

宿舎のロビーは笑いに包まれた。

気のおけない仲間と過ごす一年ぶりの団欒は村山に魂の休息を運んでくる。食堂の壁の染みも、カジの手製のテーブルにも郷愁を誘われる。

「村山君、少し時間あるか？」

珍しく固い表情で伊都淵が言った。

「ええ、明後日までは秋季キャンプの準備ということで休暇を貰ってますし、遅くなるかも知れないから帰らない旨、寮長には伝えてあります。泊めてもらえますよね？」

それには答えず伊都淵が席を立つ。

「ちよつと外へ行こう。依子、海岸に居る。後で来てくれないか？」

「はい」

心得た顔で依子が頷く。正が腰を上げながら言った。

「俺も行くよ。いい機会だからプロ野球界秘話なんてのを聞かせてもらわないと」

伊都淵の様子が普段と違うことに気づいてないのは正だけのようなのだ。他にもついて行く者は居ないかと見回す正にかおりが小さく首を振って嗜める。

「やつぱ今度はしよう、BKA44魂を撮り溜めたのも見なきゃいけないし。行つてらっしゃい、お二人さん」

裏表のない真っ直ぐな青年である正だった。伊都淵の真意は分からずとも、引くべき時であることは理解したようだ。

水産加工場群を挟んで建つ宿舎から海までは、歩いて2分と離れていない。振り向きもせず大股で進む伊都淵の背中に村山は続いた。「ここらでいいか」そう言うのと伊都淵は防潮堤に無造作に座り込む。

大きな満月と満点の星が海面を照らし出していた。本来なら潮風が薫るはずの海岸は、未だ魚の腐臭とヘドロの匂いが漂ってくる。それに苛つくかのように海鳥が長く一声が鳴いた。

ボランティア集団に合流したての頃、村山はここで家族の思い出を伊都淵に語った。声を詰まらせながら話す彼を、慰めるでもなく励ますでもなくただ黙って伊都淵は聞いた。その時、永遠に塞がることなどなく思えた深い傷を薄い瘡蓋が覆ってゆくような感覚になったことを村山は思い出していた。

「お疲れさん、凄い成績だったな。万年Ｂクラスだったパイレーツに日本シリーズのチャンピオンフラッグまで獲得させたのは君の頑張りあってこそだな」

「ありがとうございます。これもあなた方のお陰です」

「謙虚でよろしい、と言いたところだが君の血の滲むような努力がなければ成し得なかったことも事実だ。有言実行、大したものだよ」

防潮堤から垂らす伊都淵の足先が海面に触れそうだった。震災前にもっと距離があったはずだが……ガレキが片付き産業の復興が進んでも、沈下した地盤が浮き上がってくることはないのだろう。失った家族が戻らぬように――村山は胸に小さな痛みを感じた。

「どうだ、目的は達成したことだし我々の許へ戻ってこないか？」

契約は単年なんだろう？ 100万ドルは無理でも今年の年俸プラスアルファぐらいは出してやれる。ちよっと思いついたことがあって起業も考えているんだ。生憎、俺達の仲間は金勘定に疎いのばかりでな、気心の知れた元銀行員の君が加わってくれば、こんな心強いことはない」

「どういうことでしょう？」

村山は急にそんなことを言い出す伊都淵の真意を図りかねた。あれほど親身になってパイレーツ入団の後押しをしてくれた彼が何故、今になって……遠く水平線を眺めていた伊都淵が村山に視線を移して言った。

「君の腕は限界だ。これ以上酷使すれば取り返しのつかないことになる」

握手した時の伊都淵の表情が気のせいではなかったことを村山は悟った。しかし、医者でもない伊都淵に何が分かつと言うのだろうか。伊都淵の言う通り、当初の目標には到達した。しかし人間には欲がある。言い換えれば向上心というものだ。公式記録に球速の最高位を刻みたい。セーブ記録の更新も故障さえなければ可能だったはずだ。確かに疲労は溜まってはいるが、右腕には十分な静養を与えて来季に望むつもりだったのだ。疑問そのままを村山は口にする。

「医者ではないが、医者にも分からないことを解する人間も居るんだよ。世の中にはな」

伊都淵は大きく一つ息を吐き「仕方ないな」といった様子で続けた。

「今もその腕が人工筋肉だと思っっているのかい？ 移動の飛行機で、空港のセキュリティチェックに引っかけられなかったことを変だとは思わなかったのか？」

知っていたのか……伊都淵の言葉に村山は愕然とした。しかし「思っているのかい？」というのは何なのだ——確かにセキュリティチェックで止められなかったことは不思議にだったが、医療用の金属にはそういった免責もあるのだろう、と自分に言い聞かせていた。「ですが、医療用のボルトやワイヤーは許されるときいています」「あれは感度が下げているんだよ。ヘアピンやガムの包み紙までをも感知してたら空港業務が滞ってしまうから。君が言った医療用のボルトやワイヤーに関してもしそうだ。申告しておけば、このサイズならそうなのだろうと解釈されるんだ。ただ綱目SMA人口筋肉で前腕を形成したとすればそうは行かない、なにせ500MPaもの応力を発生するんだからな。飛行機の窓を叩き割ったり椅子を引きちぎったりされたら航空会社だって困るだろう？」

——案ずることは何もない。心の奥底まで見透かしてしまいそうな目で伊都淵はそう笑った。

「それなら軟式野球の経験しかなかった僕に何故あんな球が投げられるようになったのでしょうか？ リハビリについていただいた看護師さんは僕の腕は特別なんだとおっしゃいました」

そう言ってから、自分自身で秘密を明かしてしまったことに村山は気づく。さもありませんといった顔で見返す伊都淵から視線を引き剥がすようにして海に向けた。

「その看護師さんの名前は所梓だろう？ 彼女は俺の友人だよ」

誰にも告げたことのない看護師の名前を言い当てる伊都淵だった。村山は横っ面を張られたように顔を戻す。どうやって調べたのだろう——そして誰にも言わない、と言った梓さんの言葉は嘘だったのか……

「そろそろ、君に全てを話す時が来たようだな。梓の名誉のために言っておくが彼女は君について何も語ってはいない。俺は人の意識を読むことが出来る。操作もだ。詳しく話すと長くなるから今はこの説明でいいだろう。」

話が深刻にならないようにとの配慮なのだろう、それにしても意識が読めるなんて、と村山は口元を緩めるが見返す伊都淵の顔は真剣そのものだった。

「俺はここに来る前、梓と——正確には所夫妻とひと悶着あった。自分の身を守るため、俺はやむを得ず彼女の意識を読んだ。その時に人工筋肉・東北の青年という言葉を断片的に拾い上げていて、君を見たときの急激な電位の変化を短絡的にそこに結びつけてしまったようだ。先入観つてのは怖いもんだな」

村山は混乱した。伊都淵の話がどう続いて行くのか、その先には何が待ち受けているのかさっぱり分からなかった。

「彼女を恨むなよ、嘘も方便つてやつだ。それを信じようが信じまいが君が治ってくればよし、そんな判断だったと思う。ただ、何故か君はそんな途方もない話を信じてしまった」

伊都淵はそこでポケットからタバコを取り出すとプラス製のジッポ―で火を点け、大きく一服目を吸い込む。

「そろそろ依子が来るな、結論を急ごう。火事場の馬鹿力ってヤツを知ってるかい？ ほら、小柄な奥さんがタンスを持ち上げたりするって話だ。ここから少しこ難しい話になる、よく聞いていてくれ。そもそも人間は筋力の70パーセント程度しか日常生活に於いて使っていない。筋繊維や骨格を傷めることのないように脳の運動野が制限をかけているんだ。ただ成人男子の大腿筋は1tの伸縮に耐えることが出来る。これは他の部分も同様だ。筋力ってヤツは筋肉の断面積に比例するものなんだ。優れたアスリートはそのパフォームスを100パーセントに近づける術を追い求め、日夜努力を重ねている。そして君はそれを開放する能力を、自分の腕は人口筋肉なんだと信じることで身につけたんだ」

村山は息を吞んで伊都淵の口元を見つめ続ける。

「考えてみるよ。例えばプロ野球の選手、同じような体格でも長打力のある選手とフェンス際までは飛ばせるがそこまでの選手がいる。ピッチャーもそうだ、同じような体格でもせいぜい135km/h止まりのも居れば150km/hをゆうに超えるボールを投げるのも居る。勿論、全身を上手く使えているとかいう問題もあるがそれだけではない。誘発脳波を使っているかいないかが、その差として現れているんだ」

その時、背後で足音が聞こえて伊都淵が振り返った。

「来たな」

依子の小柄な体が長い影を引き連れて月灯りの下に現れる。

「話は済んだの？」

「ああ、ここからが仕上げだ。頼む」

そう言うのと、伊都淵は周囲をきよきよと見回し「それでいいだろう」と、津波でうちあげられたままになっている沈錘を指差した。優に100——いや、200キロはあろうかというサイズだった。

「錆だらけじゃない、手袋をしてくるんだったわ」

「後で、俺がキレイに洗ってあげるよ。用意はいいか？」

コクリと首を振り小さく握りこぶしを掲げる依子を見て村山が訊ねる。

「何をするんです？」

怪訝な表情で聞き返す村山に「いいから見てろ」といった感じで依子に向けて掌を差し出した。

掌の指し示す方向、沈錘を前にした依子がニコリと笑うと、よしよ、と言ってそれを持ち上げた。目の錯覚ではない、浮き上がった沈錘の下から依子の足が覗いて見えていた。幽霊でも目にしたかのように村山の顔から表情が抜け落ちた。

「もういい？」

「ああ、お疲れさん。先に帰っていてくれ」

パンパンと手を払いながら宿舎の方角へと背を向けた依子の手から、夜目にもハッキリと錆の粉が舞っていた。

「言葉にした途端、聴いた側が構築するイメージは自身の理解の及ぶ範囲で形を成す。さっき言った通り先入観にはそういう害悪が伴うものなんだよ。だから見てもらった。どうだい？ あれが運動野の制限を取り払った人間の筋力だ」

村山はじつと自分の右手を眺めていた。

「勿論、あんな真似をしょっちゅうしてれば間違いなく筋組織や関節を傷める。君の腕はそれを1シーズン続けてきたんだ。もう休ませてやってもいい頃だろう。パイレーツの日本シリーズ制覇でこの土地は活気づき、闘う君の姿は人々に勇気を与えた。次はそれぞれが自分の足で歩き出すのを待とうじゃないか」

懸命に言葉を探すが、真っ白になった頭の中に浮かぶものなど何もない。「ですが……」「しかし」口をついて出るのはそんな接続詞ばかり。よもやと思って手を添えてみる沈錘はビクともしない。どうなってしまったんだ僕の腕は……

「少し考えさせて下さい」

打ちひしがれた様子の村山は、それだけを言うのが精一杯だった。

新たな旅立ち

「おはようございます」

ロビーに降りてきた村山に、かおりが明るく声をかける。

「あ、おはようございます。皆さんは？」

呆然としたまま海岸から戻った昨夜、真新しいシートが敷かれたベッドに腰を下ろした途端、突如として襲ってきた疲労感に抗う術なく眠りに落ちていたのだった。壁の時計は九時を少し回っている。規則正しい生活を送るここの住人達は既にそれぞれの活動を始めているのだらう。宿舎は静まり返っていた。

「雄ちゃんから朝一番の新幹線で帰るって連絡があって迎えに行つたわ。カジさんは産廃業者と打ち合わせ。あたしは村山さんの食事を作るために残ったの」

「そうでしたか……申し訳ありません」

「またあ、たった一年留守にただけでそんなに他人行儀な言葉遣いになっちゃうんだから。仲間でしょ？ 遠慮しないで。二人共、奥に行っちゃうと誰か来ても分からないからここへ運んであげる。テレビでも観てて」

「すみません」

「ほらまた」と言つてパチンと村山の背中を叩いたかおりが調理室に姿を消す。伊都淵と依子が見せた不思議な力をこの人達は知っているのだろうか？ そんな思いで彼女の背中を見送った。

めまぐるしく過ぎた昨夜を振り返ってみる。ひよっとしたら夢だったのかも知れない——それとも大掛かりな悪戯で僕を脅かそうとしたのかも——だが、沈錘が持ち上げられなかったのは事実だ。指を曲げ伸ばししてみる。傷跡が引き攣れるような感じがした。

「お待たせー」一人分の膳を持ってかおりが戻ってくる。村山の前に置いた膳から自分の湯のみを持ち上げて正面に腰を下ろした。

「目の前に海と水産加工場があって何も手に入らないってのは絶対

におかしいわよね。政府は原発にかかりきりで岩手や宮城の水産業には手が回らないとも言うのかしら。その干物もスーパーで買ってきたのよ」

小あじの一夜干しに揚げと豆腐の味噌汁、高菜の漬物にご飯といった朝食の定番のようなメニューだ。湯気の上がる椀から味噌汁をすすると口の中に懐かしさが広がった。

「中小ばかりの地場産業では数ヶ月仕事が出来ないだけで致命的なダメージを受けま……るんだ」

硬い言い回しを再度指摘されることのないよう、村山は途中で気づいて言い直す。

「ふうん、それで？」

かおりが先を促す。

「公務員報酬もこの数年横ばい状態の景気であるこの国で、長期且つ低金利での融資程度では元通りの活気を取り戻すのは難しいのかも知れないね。円高は歯止めなく進み、アメリカは職員の一時解雇をした市がある。元に戻そうとする程度の努力では何も変わらないんじゃないだろうか。あれからもう一年と七ヶ月が過ぎてこの有様なんだから」

「村山さんが総理大臣だったらどうする？」

「沈下した場所を避け港を陸地まで広げ、サルベージ船を用意して海をきれいにすることから始める。そうなると当分漁業はできなくなるから、漁師さん達をそこで雇用する。先は長いけど泥縄的補修では「また地震が来たら」という不安を抱えながら暮らすことになる。急がば回れって言葉もあるしね」

「さっすが元銀行員。経済はお手の物って訳ね。じゃあ水産工場で働いていた人達や農地を失った人達はどうすればいいの？」

「さあ、そこまでは……伊都淵さんなら何か考えているのかも知れないけど」

そう行って村山は昨夜から気になっていた金属製の桶に目をやった。かおりは即座に村山の意図を汲み取って答えた。

「あれはタツキ……伊都淵さんの研究みたいよ。あの柱もそう。どんどん狭くなつていつちゃう」

「何か作っているのかな？」

聞き返しながら、ここの住人は一様に勘が鋭く感情の機微を読み取るのにも長けていることを思い出していた。ただ一人、そこ抜けの明るさで周囲を和ましてくれる正を除いて。

「バイオなんとかって言うてたかな？ 培養なんかかも——あたし、そっち方面はちんぷんかんぷんだから」

おどけて舌を出すかおりに、思い切つて訊ねてみた。

「あの二人……伊都淵さんと依子さんは以前からあんな力を？」

？力？どうとでもとれる言葉を用いて。

「ああ、あれ？ 驚いたでしょ？ でも安心して。あの人達は自身に厳格なルールを敷いているの。やむを得ない場合以外、あの力は決して使わない。村山さんに最初に逢った時もそうだったでしょ？ やつて見せてはくれないけど倒れた電柱ぐらい一人で持ち上げちゃうんじゃないかしら。勿体ないわよね、あの力があればカジノで大儲けだつて出来るでしょうに。総理大臣にだつてなれちゃうんじゃない？」

人の意識を読み、操作することが出来るならそれも可能だったろう。何故そうしないのだろう？ 自分なら……と考えて村山ははつとした。

僕が野球をする理由は支えてくれた人々への感謝の表明、東北復興の規範をなることだったはずだ。それがいつのまにか記録を追い求め歴史に名を刻むことにすり替わっている。

愚かだった……

襲い来る自己嫌悪に黙り込んだ村山を置いて、かおりは膳を持つて席を立つ。「役目は果たしたわよ」調理室の流し台に水を貯めながら、口の中でそう呟いた。

<どうするのかしら？ 村山さん>

くさあね、後は彼次第だ。意識を操作して仕事を手伝わせる訳にも行かないだろう？　ただ、自分の体の真実に気づいた今——つまり抛り所を失った彼に、もうあのボールは投げられない。よく走り込んだ下半身だったからなんとかシーズンを持ち堪えたものの、彼の肉体は腕だけでなく全身がボロボロになっている。車椅子や介助が必要となる前に野球を止めさせることが俺達の役目だったんだよ。意識だけで会話を交わす伊都淵と依子に正の不平を上げる。

「また二人だけで話してるだろう。俺にも教えてくれってば」

雄一郎が乗った新幹線を待つ改札は、平日の早朝でも出張のビジネスマンやツアー客でそこその賑わいを見せている。今や東北の至宝とも謳われる村山の来シーズンの去就をうかつかと口にする訳には行かない。正にもそれは分かっているようだ。「言葉にしてくれよ」とは言わない。

「いいよ、用意しろ。頭をクリアにするんだ」

「ごくりと唾を吞んで正が身構える。

<2番線にやまびこ271号が到着します>

「なんだ？これ」

きょんとした顔で正が呟く。

「リハーサルだよ、続きは雄一郎君を拾った車の中だな」

依子が声を上げて笑った。

「何だよ、じゃあムラさんのあの腕は人口筋肉なんかじゃなかったってことかい？」

息せき切って後部席から身を乗り出す正に反して、雄一郎は落着き払ったものだ。

「あれだけのボールを投げ続けて、上体を支える下半身が根を上げないのはおかしいなと思っていました。シーズン終了までもたせることが出来たのはあの休養があったからですね？」

「さすが、一流のアスリートだな。目の付け所が違う」

「どうせ、俺はシート争いに敗れた二流ですよ、だ」

膨れっ面になった正には取り合わず、伊都淵は続ける。彼等の乗ったRV車は石巻港ICを下りようとしていた。

「村山君を担当した看護師は彼の腕を人工筋肉だと信じ込ませることで回復に一縷の望みを賭けた。だがそれは彼への呪縛でもあった。人より優れた能力があると知れば誰だってそれに貪欲になるもんだろう？　彼は肉体の限界を超えてそれを追い求めようとした。残酷なようだが、俺は彼に死刑判決ともいえる宣告をせざるを得なかったんだ」

苦悩に満ちた表情で伊都淵が言った。

<あなたの気持ちはいつか必ず伝わるわ>

「村山さんのことです、いつかは分かってくれますよ」

依子の思考と雄一郎の言葉が同時に届く。車は女川街道に入り、宿舎の青い壁が近づいてきていた。

「お帰りなさい」

玄関を抜けた伊都淵達を出迎えたのは、やけに明るい村山の言葉だった。

「踏ん切りがつかしました。新事業の財務担当、僕に務まるかどうかは分かりませんが、是非やらせてください」

伊都淵の顔がぱつと輝く。背後の三人にも笑顔が広がった。

「そうか、その気になってくれたか——その培養槽に入っているのはバイオ流体緩衝材、まだ名前はつけていないが画期的な製品になると思う。何せどんな応力も分散してくれるんだからな。事業が軌道に乗れば雇用も広がる。俺は地震にも津波にも負けない街を作りたい。組成に粗のある材料なら——」

口角泡を飛ばす勢いでまくし立てる伊都淵と真剣な眼差しでそれを聞き入る村山の周囲を仲間達を取り囲んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7707w/>

錯覚の閃光

2011年10月31日16時16分発行